

二度目の初恋を月の下で

檻@102768

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

です。

——これは、愛も願いも叶わない物語
愛も願いも、叶わなくてもいいのだと知る物語
です。



地球が無何有郷の理想郷と化して幾星霜。

星そのものが淨土となつたそんな時代で、なおも常しえの樂園と称される島でのひとつのお会い。

珊瑚の姫が邂逅したのが手のひらサイズの彼ではなく、ふらり現れた魔術師だったならのIfストーリー。

ああ。不治なるもの、汝が名は愛情なり。
——なら恋は？

※2017/03/26 日間ランキング12位を頂きました。
読んでくださった皆様、本当にありがとうございます。

目次

邂逅

恋の続きは星の夜から

執筆

星の目覚めに映るのは

月の願いと生命の定義

宙と海、そして珊瑚礁

魔術

願いの対価とその余祿

虚構も時には欲される

回想

理想の成就の舞台裏

冷めた現実、醒めた夢

終極

心に名前をつけるなら

それを愛と呼べずとも

解説

生命の定義 比較

登場人物

余章

月が煌くいつかの夜に
後書き

164 131

129 119

114 92

86 76

60 45

33 22

11

1

邂逅

恋の続きを星の夜から

眉唾な話だけど。私の旦那様になる人は、最後の魔法使いだつたら
しい。



今年もいよいよ終わりの十一回目の満月の夜。

あと一ヶ月で今年は死んで、何の約束もない次の年を迎える。

その時までにわたしたちが生きている保証は、あの透明な海月ほど
もない。

ただいま西暦、たぶん三千年くらい。

人々が生きていくための情熱を失つて。

何千年もかけて築き上げた文明を手放して。

お互に傷つけ合い磨き抜く事も無くなつて。

完成する為に生存しているというのに、生存する為に完成を受け入
れない。

そんな矛盾から始まつた人間の生存は、事ここに至つて成就した。生命としての歩みを進め辿り着くのではなく、歩みを止めてこそ来

臨し齋された終着点。

誰もが新たな道未知を望まない、安寧のユートピア。

血で血を洗うような争いが絶えなかつた頃から見ればさぞ大層な結果かもしれないが、元より命からだも士氣やるきも永遠たり得ない人類が、枯渇した資源を前に省工ネ志向にシフトしただけだ。

取り立てて騒ぐようなことでもないし、騒ぐような人も、もういない。

そんな時代の中でもまだ誰かを気遣えるマメな人たちからの十何度目かの求婚を跳ね除けて、わたしは今日も今日とて、高台から海岸線を眺めている。

「空に水。水に空。月の空には碎け散つた海がある」

光る海に目をやりながら、つい口から零れる祖母の歌。

歌詞に関しては妙に要領を得ないというか、真意を読み取れないといふか。何を伝心つたえしたいのかわからぬけれど伝承つたわづてされている詞の集合。

わたしに伝えた祖母は夢の中にいるみたいな人だったから、あやふやなのも仕方ないのかもしれないけど。

凜いだ海面を不自然に舐ねぶる風につられて空を仰ぐと、緩やかに高度を上げ、天を滑空する真つ黒な鋼の機体を瞳が捉えた。

アリシマの君きみのお帰りらしい。

撃墜マーク、これにて十六人目。

あの夜よりくどい黒色は、無粹な求婚者ひときわに一際の難題を押しつけ追い返し、破談に僅か一日足らずという新記録レコードを達成した結果だつた。

前代未聞と咎められたけど、今日ばかりは仕方がない。満月にわざわざ訪ねてくる相手が悪い。

「でも残念。空は飛べても、月のサカナはやつぱり無理なのね」

わたしは予かねてから、求婚者に難題を提示し、それを叶えられたのなら求婚に応じるという形をとつていた。未だに求婚者が絶えないところから察せられるよう、今のところ成就した人はいない。

何せわたしが所望したものはいずれも『難題』の名に恥じないほど支離滅裂。実在するとも思えない、誰もが聞いたことも無いような一品ばかり。

羽のあるモグラ。

サファイアの実る樹。

水で出来た飛行機。

鶴の鳴き声。

エトセトラ。エトセトラ。

今回のお題は月のサカナだつた。

月は一方通行の世界だ。行く方法はまだ残つてゐるらしいけど、帰つてくる方法がないらしい。行くだけなら現実的だけど、戻つてくる事はできない。生きていながら見る事のできる、現実的な死の世界。

同じ地球のこの島に渡る事すら、飛行機なんてものを持つてる限られた人しかできないというのに、月に、さらに居もしないサカナを取つてこいといふのだから、アリシマの君が踵を返すのも頷ける。けれど誓つて、わたしは本気なのである。

難題をこなしたのなら誰であろうと一生を捧げる覚悟。

——だつてそれぐらいでしか、わたしは愛を測れないから。

月の開拓が成功して人口問題をとりあえずやり過ごし、地軸転移に
も耐えきつた地球人類。

そんな彼らに訪れた、未曾有でとても静かな大災害。みぞう
エンドロール

人類は、情熱を失つたのだそ�だ。

誰もが唐突に全てがどうでもよくなつた。

「生存のため」の熱い衝動をすっかり失くした人々。

それが、現代のわたしたち地球人類。

愛をはじめとして多くのが失われたというこの星で、わたしは愛なんでものを自分の内に感じたことがないし、自分が持っていないモノを他人が持っているかもわからない。

その上でわたしを愛するという人がいるから、それを言葉ではなく行動で裏付けて欲しいと思っているだけのこと。

だつて、わたしにはそれが本気で分からぬ。愛というものが想像できない。互いを想い合うというのは本当に気持ち良いことなんだろうか。もつと系統的に相互補助した方が気持ち良いと思う。そうした方が安心も打算も明確な作業としてあるし、見えない心を理解するより現実的だと思う。

このように、わたしが求婚される度に無理難題を押しつけるのは、わたしは自分では愛が測れないから、相手に測つてもらつていいだけなのだ。

わたし以上に価値のあるものを手に入れてなお引き替えにできるなら、その人は確かにわたしを必要としているのだと証明できる。

殿方も人間も好きだけど、愛だけは理解できない。

でも、それなりに幸福だ。

それに、現に愛なんてなくつたつて、太陽と水と空氣があれば、なんとなく生きていけるのがわたしたちだし。

目移りしそうなほどに無数の星で満ちる夜空。

己が地表の最果てをも通り越して遙かなこの星に届く程に眩いのに、欠片も目を焼く事のない柔らかな灯あかりの群れ。

白。金。銀。赤。蒼。黄。橙。

底なしに深い漆黒に音もなく転がる、七色の粒。

それを収められるだけ瞳に収めて。ひたすらに優しく穏やかに照らしてくれる空と海を背景に、わたしは月下の元で舞い踊る。

「星はまたたく。海はさざめく。人恋しくて珊瑚は謳う。

わたしたちは海月くらげみたいに、ふわりふわりとその日ぐらし。フフ

……なーんて」

——こんな調子だから、人類つてのは終わつたのかー。

どこか達観したように諧謔しながらも、それに後ろ髪を引かれる所は微塵もなく。

限りなく当事者ながら他人事めいた胸中の吐露を交えた、そんな独白と共に織りなすステップに。

「おや。己を海月に喻たとえるとは、また穏やかに強したたかだね」

こちらの思索を切り裂くかのように鋭く——ではなく。

思考の間断に滑り込むような。薄く、それでいて気遣いを感じさせる丸みを帯びた、柔らかな声を聴いた。

振り返ると、朝日にも闇夜にも紛れそうにない、極端な色合いの人。

目の前に確かにいるはずなのに、その存在を疑いそうになるくらいに現実味がない。

真珠を思わせる滑らかな肌に、冬のないこの島では伝え聞くだけの新雪の如き髪は腰にまで届いている。

そして、あたかも月をそのまま嵌めこんだかと錯覚させる白銀の虹彩。

身に纏うは星の光でも照らされない、どこまでも深い射干玉の天鷲絨。^{ビロード}

それで編み上げられた継ぎ目のないローブを纏うその出で立ち。

何もかもを覆い隠し塗り潰すような黒一色の装いと。

それを知ったことではないと言わんばかりに跳ね除ける白の瘦身。解け合わない陰影の輪郭は景色を抑え込み、まるで大気に浮かび上がっているかのよう。

白と黒。¹

たつた1 bitだけで表現される魔貌を湛えたその青年は、そう声をかけてきた。

「こんばんは。亜麻色のお嬢さん——良い夜だね」

「こ、こんばんは……はじめまして、でいいのかしら?」

「ええ。はじめまして」

例を見ない風貌に少々言葉が詰まりつつも、何とか失礼にならないよう言葉を絞り出した。

ぎこちなかつたけど、それにこりと微笑んで返してくる。

向かい合う青年は星に満ちた空と、緑に満ちた陸と、光に満ちた海を、それぞれ流れるように眺めながら、滔々^{とうとう}と言葉を紡ぐ。けど視線

が釘付けになつてじいっと眺めるわたしには右から左。耳には入るがひつかることではなく通り過ぎていく。

彼が長々と述べている隙に、思わずちょっと呆けていたのを再起動。内心では軽く懼きながらも、呼吸を僅かに整えて。

「えと……島の外から来た人？」今までいろんな人に求婚を申し込まれてきたけど、色とりどりに粧し込んでくる人ばかりで、あなたみたいな白黒モノクロの人にははじめて……」

「…………求婚？」

笑みの形に崩していた相貌を疑問の形に整えて、はて、と首を傾げた。

今まで外から訪ねてくる人なんてその件ばかりだったから、てつくり今回もそうだと思つたけど。この様子では違うらしい。

「ここには、知らない事を探して足を運んでみたんだ。『満月の夜に光る海』が故郷で有名だつたので、ふらりと寄つて来ようかなと。

結婚おとがいも——確かに経験はないけれど

頤に指を添えながら、斜めになつていた首が更に水平に傾いていく。

「えつと、あなたは？」

「私かな？　かつて文明に追いやられ、その文明すらも粗方放棄された現代では絶滅危惧種な魔術師だよ。

ようやく引継ぎが終わった両親はそっぽを向いた後だからね。きつと地上で最後の一人だ」

自虐と自慢のニュアンスを混交させながら、どこか悪戯っぽく彼は自分をそう形容する。

魔術師。魔術が何かも具体的に聞いたことがないけど、島の外にはそんな人もいるらしい。

とりあえず、島の禁則を確認する。この島は海から入ることが固く禁じられているのだ。

彼の傍に飛行機の類は見当たらないけど、身一つでこの島に来る方法なんてあるのだろうか。

「（）にはどうやつて来たの？　海から入るのは禁止だし、空から飛んでこないといけないんだけど」

「なら問題はないかな？　確かに私は浮遊^とんで来たのだし」

「え？」

「ん？」

二人して首を捻る。

なんだろう。音^{ルビ}は同じだけど、微妙に字面^{いみ}が違った気が。

彼はしばらく押し黙つたものの、益体がないと割り切つたのか思索を切り上げ、眞面目な方向に表情を改めて、

「お嬢さん、と声を掛けはしたけれど。

その面立ちや髪の色から察するに、君が件^{くだん}の珊瑚の姫君で合つている？」

「？　えーっと…………多分わたしで合つてる。『姫』とか『お姫さま』とか呼ばれてるから」

珊瑚云々はよくわからないけど、と内心で付け加えておく。思いたる節がなくもないけど、確証もなく声に出すのは躊躇われた。

「結構。噂に違わぬ美人さんだ。

初めて会つた現地人第一号が探し人とは幸先がいい」

私の運もなかなか捨てたものではないね、と裏付けが取れたからか顔を綻ばせる彼。

あいまいな返事でも納得のいく答えだつたらしく、満足した表情でうんうんと頷いて。

そうしてふと気が付いたかのように、

「…………つと、失礼。やんごとなき身分の御仁^{（みやこじん）}というのなら、先までの言葉遣いは改めた方がいいのかな？」

少しだけ焦つたように顔色を伺つてくる彼。

詫びるよう言いつつ、厳しめの返答があるまで口調を直すつもりはないらしい。

うん。まあ、別に。

「気にしなくてもいいわ。別にわたしもどう偉いのか知つている訳じゃないし。口調もそのままでいいわよ？」

「では、お言葉に甘えまして」

わたしの穏和な返答に、心なしか固くなっていた肩肘を緩めたみたい。

言つたとおりに初見の時のままの口調で、「お願ひがあるんだ」なんて前置きを述べて。

「——この島に伝わる童謡などの物語を教えてくれないかな。
先程言つた通り、未知を求めてやつてきたんだ。
できる事なら、私が見たことがないと確信できる、どこにも出版されていないものを」

と。そう続けてきた。

大人びたように落ち着いた彼が、そんな子供みたいな要求をしたからだろうか。

その思わず相好を崩してしまって。
ごく自然に。その要望に応えたくなつていた。

「あはは。なによそれ。

……それなら一つ、お望みの歌があるわ。おばあちゃんから教わつた話だけど、それでいい?」

「口伝とはまた珍しいものを。それなら確かに私が知つていることはないだろうね。

あと、叶うのなら直筆で、文字にして頂けないだろうか。

伝統に従い伝え聞くのも悪くはないけれど、やはり息吹の籠つた一品を戴けるのなら越したことはない」

……こちらが承諾したのを足掛かりに、さらっとハードルをあげてきた。この者意外と抜け目がない。

確かに、カタチにして欲しいという気持ちはわからないでもないけど。でも。

「それは無理よ。わたし、読み書きができないもの」

「なに、問題はない。それくらいこちらでお教えしよう。別に焦るようなこともないからね。

気長にでも構わないから、ぜひお願ひしたいな」

。。。

。。。

え―――つ!?

思わず食い下がりについ表情が固まる。

。。。。。でも、ここまで積極的に望まれては断りづらい。

それに、断つてまでやりたいこともないし、興味をそそるものを探示したのはこっちだし。

気付くと、期待するような彼の瞳と自分の後ろめたさに圧されようには、首を縦に振つてしまつた自分がいて。

こうして、わたしは初めての創作することになった。

執筆

星の目覚めに映るのは

ところ変わつて、わたしの部屋である。

如何に少女らしさに欠けている自覚はあれど、わたしだつて何度も求婚される年頃の乙女だ。

私的な空間くらい、それなりの愛嬌に満ちている。

女性には欠かせない、身だしなみを整える化粧台に鏡。

開け放つてある戸の方に目を向ければ、月が見えるあの丘とは違う、丹精に整えられた緑いっぱいの庭が一望できた。

差してくる陽光は、目を眩ませられない程度に部屋の中を照らし上げる。

その光で様々な色彩が浮かび上がる鞆^{まり}が転がり、熊やペンギンのぬいぐるみが鎮座するそんな場所に、今。

見るも相応しくない、物々しい代物がでんと存在を主張していた。

正面には木石の文鎮と和紙。

右方には筆と硯^{すずり}。

左方には代えの半紙の山。

わたしは彼との約束を果たす為に、日ごろは埃を被つてる机に膝立ちで向かい合い、今まさに、執筆に取り掛からんとしていた。

硯には既に磨つた墨がたっぷりと湛えられており、望めばいつでも前方の純白に黒色を混ぜ込むことが可能だ。

うん、準備万端。

もう開始に必要なのは気構えだけ。

肝心要のそれが自分に揃つてゐるとは言えないけど。

「うーん……ま、やるしかないか……」

一の足を踏んでも仕方がない……なんて消極的な決意くらいはもつていて。

そんな風にぼやきながら組んでいた腕を解いて、筆を硯に溜まつた墨に浸した。

「ん……」

半紙に筆先を置き、とりあえず思い当たる文字を書いてみる。こう、ぐぐぐつと。

そもそも文字を読めない以上、あんまり注意深く眺めたこともないし、どこをどう区切ればいいのかなんてさっぱり。

ひとつひとつに「書き順」なんてものもあるらしいけど、わたしは全く詳しくない。

でも、大体こんな感じよね？

「……その記号というか、図形染みた物は文字なのかな？」

「ん？ そのつもりだけど何に見えるの？」

「……、……その、文字のつもりだろうというのは察したんだけれど……何と表現すればいいのかの語彙の持ち合わせがなくて……」

「……、……考えてみれば、初めて書いたんだから当然よね」

俄仕込み未満の拙い書き方では、その道何年の達人ペテランには文字と見做してすら貰えないらしい。

手元を覗き込んだ後、難しい顔でうんうん唸うなる彼を見遣りながら肩を竦すくませた。

でも覚束ない試みも決して無駄ではなかつたらしく、一転して明るい表情に。

駄目なところばかりじゃなく、喜ばしい発見もあったみたい。

「だが、一安心できる要素もある。

盲目の者が色彩を識別できない様に、何らかの先天的な理由で文字が書けない……という訳ではないことが解つたから」

「そうね……わたし以外は、ある程度書けると思うけど」

「文字……言語とは『何を重視しているか』を基点に差異ある物を区別することで、独立世界の思考を運営する通貨だ。

相手の通貨を尊重することで、自分の認識に解釈を輸入し回す歯車として代用できる。

なので、まずは思考を文字に起こすこと自体に慣れてみるのが先決かな」

書き順に沿つて書いてみるだけでも随分違うし、と彼は締め括つた。

本当なら今日から物語を書き始める予定だったけど、どうやら変更になるみたい。

どうするかが固まってしまう前に、ちょっと思つたことを尋ねてみる。

「でも、そんなに苦労して文字を綴れるようになつても、伝わらないことはあるのよね？」

わたしが実際にそうだし。例えば今、彼がどれだけ熟練した腕を發揮して何を書いても、読めないわたしには空振りにしかならない。

貨幣おかねがいくらあつたところで使い道がないのなら、それは文鎮位にしか役に立たないとと思う。貨幣の方に不備がある訳じやないのに。

そう思いながら、和紙を押さえてそれをちらつと眇めた。

「そうだね。というか、それは原理的に無理だ。言葉にそこまでの機能はない。

たとえ文章を自在に操れても、完全に意図を『伝える』というのは不可能だよ。生憎だけれどね」

「ねえ。それなら貴方がわたしの言葉を聞き取つて文字にしたほうが

早くない?」

そう打診してみる。どうせ伝えきれないものが在るのなら、零れ落ちるのを織り込み済みにした方がよっぽどお手軽でいいと思つたのだ。

……実は、割増しになりそうな作業量を億劫に思つたのは秘密。

「無論検討はしたのだけれど、やはり私経由だと二重に齟齬そごが生じて劣化してしまうのは避けられない。最初に君が書いていたものを、私が『文字』とも『記号』とも表現できなかつたみたいにね。そういうのが積み重なるのはよろしくない。

折角書くのなら、出来る限りは自然のままで。そちらの方が君としても好ましいと思うよ」

「…………うん」

「なに、こと順応能力において、君たちは特筆に値する。

私の言語習熟の域に直ぐにでも達するよ」

『君たち』つて、この島の人間つてこと? わたしたちも充分『情熱を失つてしまつた人類』だけど――

「? いや、言葉そのままの意味だけれど……」

「…………」

なるほど。たしかに少し会話が噛かみ合つてないかも。

このまま原案だけ出して書くのを任せるのは確かに不安。彼だつて落ち着かないだろう。

こつちの返答を待つ彼をじいっと眺めながらちよつとだけため息。それは落ち込みを表すものではなく、気分をリセットするためのもの。

――書くつて、一度決めたからには。

「ちよつと、頑張ってみますか」

気合を入れて改めてそう宣言すると、彼はにつこりと嬉しそうに笑つた。



むかしむかしのお話です。

影の海という処に、女の子の形をした、一つの石がありました。美しい髪と、可愛らしい唇。

誰もが好きになつてしまふ、そんな形をしていました。

女の子のまわりにはくるぶしほどの湖と、見上げるばかりの花弁。はな

なぜそんな姿になつたのかわからないけど。

女の子はたくさんの人々に望まれて目を覚ましたお姫さまでした。

でも、お姫様が目覚めた時。

お姫さまを待ち望んでいた人々は、ただのひとりもいなくなつていきました。



空に氷。氷に空。

この世界を温かな氷で包んでほしいと彼女はお願いされていました。

誰にお願いされていたかは定かではありません。

彼女が望まれていた時にたくさんいた人々は、彼女が目覚めた時にはみんなきれいに消えてしまっていたからです。

ひとりぼっちになつたところで、彼女は多くの仮説を楽しみました。

不慮の事故。

不幸な静い。

自発的な永眠。

あれこれ仮説を潰していく中、ふと彼女はこの国の法律を閲覧しました。

司法曰く。

こちらの住人はあちらの住人の恋を禁じる。

このルールを破つたものは、地上への落下刑に処す。

もしかすると。

人々はその罪でみーんなあちら側に落ちていったのかもしれません。

“うんうん”と……

いえ、首は一ミリも動かないでの、気持ち的に頷きました。

それでも彼女は真面目だつたので、望まれた仕事を続けます。都市部への余分な元素提供をカット。娯楽施設も必要ありません。

その分を環境調整に費やします。

影の海は半世紀ほどで、樹木と空を完備した都市になりました。

樹木は石灰で、空は氷を張つただけのニセモノですが。

人々が望んだコトは、人々さえいなければ、こんなにも簡単にできることでした。



七つの海を作つてからさらに半世紀。
望みを叶えれば戻つてくると思われた人々は、けれど影も形もありません。

音のない世界にひとりきり。

彼女は氷に映る、ここからでは決して見ることのできない青い星を見上げます。

人々はあの星に旅だつたのでしょうか。
せつかく美しい森を作つたのに誰も見てくれないのでは、それこそ骨折り損というものです。

なにしろ彼女は、この森になんの思い入れもないのですから。

そんなある日のこと。

——ある日のこと……

「おや？ 妙に思いつめたような顔だね。何か憂うような事でも？」

月光が差す洞窟。水面に光が跳ね返つて、陰になる空間にも柔らかく灯りが当たる。

穏やかな静寂に包まれたそこは、静かに筆を進めるのにうつてつけだろう——クリップボード——と、今回執筆の場所として採用した。

即席の用箋挟クリップボードに委ねていた原稿をなぞる先端が止まつたのを見て、佇んでいた彼が心配そうな声と一緒にわたしの顔を覗き込んでくる。

…………そんな気遣わしげな表情をさせる位、陰鬱な表情だつたのだろうか。

心当たりは、あるけど。

「そういうのじやないけど…………ここからね…………もう一人、登場人物が出てくるの。

わたし、その人のこと、なんかこう…………あんまり好きになれないのよ。

でもその気持ちが入っちゃうと、おばあちゃんの話と違っちゃうじやない？」

尻込みしていたのはそこだ。

わたしはあくまで書き手であつて登場人物じやない。主人公じやない。

それでも、彼女が自分がいる環境に対して抱いていた気持ちは理解できる。

けど、もう一人の登場人物に対する気持ちの方は理解できない。

これが単なるわたしの空想の物語ならまだしも、書くのは伝記に近いとはいえた事実ありき。

彼女の真意がよくわからないのに、そんな体で主観まじりに――おばあちゃん本人からすれば客観まじりに――筆を進めていいのだろうか？

そんな腑に落ちない物を抱えたまま紙幅を費やすのは、正直

なんて煩悶と葛藤で、難しい顔をする私の言を。

「いや、構わないよ」
数瞬間が空いたものの、彼はそんな風にあっさりと聞き入れてくれた。

洞窟に声を幽かに反響させながら、返事は朗々と淀みなく。
「私が欲しいのは客観的事実ではなく、他人の主観だからね。

客観的事実なんて見てもつまらない。歴史の年表みたいに『いつ・何処で・誰が・何を・どのように』をひたすら並べた味気ない事柄の羅列はお呼びでない。それはそれで記録としては価値がありそうだけれど、今回私は求めていない。

どこまでも独り善がりな『いつ・何処で・誰が・何を・どのようにして、『どう思つたか』』を記した、生きた物語こそが知りたいんだ』
「随分と大げさね」

壮大なスケールに膨れ上がった表現に思わず笑みを零しつつ。

その内容を吟味しながら今の自分たちの暮らしを振り返ってみると、少しだけ疑念が湧いてくる。

他人の主観……
生きた物語……

わたしが今、紡ごうとしている物語は。
本当にそう呼ぶに相応しいのか。

人々が情熱を失つて。

築き上げた文明を手放して。

お互に傷つけ合い磨き抜く事も無くなつて。

何も生み出さず、際立つて失う事も無い。

そんな目的もないフワフワとしたその日暮らしでも「生きた」内に入るのはかな……

おばあちゃんの歌じやないけど、本当に海くらげ月みたいな生き方なのに

…………海月。 そう海月だ。

確か彼は、初対面の時に随分と不思議な表現をしていたような気がする。

ふと記憶の琴線に触れた物を、奥底から括りつけるように引っ張り出して舌に乗せた。

「そ、ういえ、ば。

初めて会つたとき言つてたわね。 海月が『強か』って。

あれつてどういう意味?』

『強か』なんて、あんな水中でふわふわ漂う、自己主張のない透明色な生き物には随分そぐわない評価だと思う。

…………自己主張の塊みたいな、極端な二色の彼ならなおさら。

「遙か昔の話だが、ある種の海月が、幻想種でもない身で単体による『永続』を成し遂げたケースがあるんだ。

自身が燃え尽きた灰から新生する不死鳥に例える者もいる、なかなかに柔軟で強靭な生命なんだよ」

彼はやつぱり、穏やかな口調で幻想的な言葉を返した。

「へえ……」

ふと目線を傾けると、足を浸す今も潮騒に翻弄されるように揺らめく海の月。

笠。
蕩ける様に姿形を変えながらも、決して解ける事のない鞆やかなどんなざあざあ降りでも傷む事も穴が開く事もない、そもそも始まりから水の中な、澄み切つた雨よけ。

見た目や振る舞いから頼りなさげな印象を抱いたわたしと。

生態や仕組みから生命らしからぬ強靭さを見出した彼。

同じものを知つて、同じものを見ているのに。

全く違う結論を出している。

でも、今。

それを、違つていることを悪いことだと思わない。

「見方が変われば意味も変わる、か……」

すとんと、わだかまりが解けて腑に落ちた感じがする。

他人の主観。

彼が何を求めて、何を由としているのか。うまく言葉にはできないけど、しなくてもいいという確信がある。

言葉にしなくちやいけないのは、きつともつと別のこと。

それなら。

わたしはわたしの書き方で。

解けない疑問も、見えない不安も。ありのままに――

月の願いと生命の定義

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

——そんなある日のこと。

こつんと体に何か当たった気がして目が覚めました。

意識を起こすと、驚いたことに並木道を何かが歩いてきます。

ずんぐりとした体格。

可動範囲の少ない歩行。
すべすべで単色の肌。

およそこの世の美意識とはかけはなれた、冗談みたいな生き物だったのです。

彼女は生まれて初めてびっくりしき——生まれて初めて胸がどきどき躍りました。

この世界に宇宙人がやつてきたのです！

なのに期待のカレの第一声は、

「待て、話が違う。なんだつて月面に宇宙人がいる？」

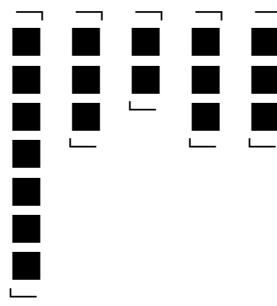
まったくロマンに欠けた感想でした。もとの

☆ ☆ ☆

彼は都市の機材を使ってかつてに生活を始めました。
「ゆうゆうじてき」というヤツです。

十二時間ごとに彼女のところにやつてきては、

タンクに水素が溜まるまでの間、独り言を続けるのです。



喉のどや肺のない彼女は話すことは出来ませんが、彼の独り言を解析します。

彼は、あの青い星から昇つてきた人間地上でした。

誰の助けも応援もなく。

何の見返りも求めずにここに来たこと。

ある日のこと――

彼は何かをブツブツ呟くと、彼女のドレスを脱がせようとしました。

……が、それだけは全力で阻止しました。

自分でも信じられないけど、彼女の体が思い通りに動くようになつ

たのは、

コレがきっかけなのでした。

「昨日は申し訳ないことをされた。

ここが地上なら、今ごろ君は檻おりの中だ」

「君には少し、人間の機微を教授しなくてはならないようだ」

彼は当然のように彼女の助けを受けながら、こんな辛辣なことを言います。

それでも彼の語りは新鮮で、ふしぎな親近感があるのです。

彼女にとって、彼は新しい世界でした。

この状況なら誰であれ、いい人に見えてしまうと思うけど……
こんな素晴らしい方がどうして死の世界にやつてきたのだろう。
信じがたいコトですが、彼女は彼のためにそこまで心を痛めたりを
したのです。

なのでせめてよい暮らしをと、かつてないほど頑張りました。
生命の原理、原子の法則を捻ねじ曲げるぐらい努力しました。

発声器官を真似て発話も試みますが、彼は聞く耳を持ちません。
むしろ人間らしく話しかければ話しかけるほど、嫌悪感をあらわに
していくのです。

彼女の行為はいつだつて空回り。

それでも……

“とても素敵なヒトでした”

“わたしのような石に、
生命の定義をしてくれたのです”

そして体もどんどん変わりはて。ある日彼に聞きました。

“わたしはヒトに近づけたでしようか？”

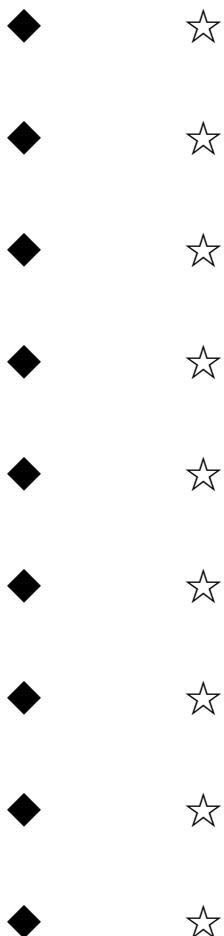
「どちらかというと、君の体は珊瑚さんごのようだ」

思えば、それが彼の口にした最初で最後の褒め言葉でした。

でもおばあちゃん、これは褒め言葉じゃありません。

でも彼女は、その言葉がとても嬉しかったようなのです。

それから十二時間はずつと、珪素^{けいそ}で出来た自分の体が誇らしかつたほどに。



ここで、もう一区切り。

蜜月と呼ぶにはあまりにも一方的な繋がりだけど、彼女にとつては、最も充実していた時期。

進化と呼ぶにはあまりにも歪だけど、恋した彼と似た姿に近づけられた、最も喜ばしい時期。

程よい所で文を結んで、筆をおき休憩に入った。

場所は緑を薄く敷いた様に広がる原っぱ。人の手による平坦さとは無縁で、なだらかにでこぼこしている。

少し行儀は悪いけど、執筆の為にと彼がどこからか取り出していた文机ふづくえにもたれかかった。

腕枕に顔をうずめながら、歓喜のまま得意げに冰そらの下を駆け回った少女の姿に思いを馳せる。

「お疲れ様。一息つく？ よければお茶でも入れるけれど」「んー……いい」

氣遣つてくれる彼には悪いけど、それより今は。

頭までくつろいで弛緩させるより、もう少し思慮を巡らせたい。行き当たつた疑問を流さず、不可解に身を委ねていたい。体から力を抜いているのだつて、思考の方に集中したいからだ。

地ほしに縫い留められたカタチで生まれた彼女が、ソラを望んだ発端を思う。

水そらを築き上げるコトを望まれた彼女が、地から飛び立つ祈りを想起する。

遠い遠い昔の回想を、まるで飴玉のように脳内で転がしながら検分するも、不思議は砂糖菓子程単純でなく、自ずと氷解という訳にはいかない。

増してや頭のてっぺんから爪先まで、甘きだけで出来ている訳もない。

彼女は何を教わったのだろう。

それを聞いて彼女は何を想つたのだろう。
それを元に。彼女は何を願つたのだろう。

輝く星そのものである彼女の目に。

過去の己と決別してまで手を伸ばすまでに、眩しく映つた何か。
星の表面にあつて、月の地平水平の何処よりも遠い遙かな傍。

確かに全貌は見えている筈なのに、内部にどこか空白を感じる舌触り。
突けばカラカラと音を立てそうながらんどうには、彼女の時——
——どんな味が詰まっていたのだろう？

「いのちつて、なに？」

——知らず、そんな言葉が口をついて出た。

それにきよとんとした視線で返す彼。別に口を滑らせた訳でもないのに、見返してきた目が妙にくすぐつたくて。

慌てて取り繕うように、吐き出した疑問を補足した。

「ちよつと気になつたの。こうして命があつて生きてはいるけど、『命が何なのか』ってあんまり考えたことなかつたから。
……あなた、知つてる？」

口伝では、物語の大まかなエピソードしか教えてもらつてない。
だからそういうことを“教えてもらった事実”は知つても、個別の挿話を掘り下げた“内容の詳細”までは知らないのだ。

彼女が彼を愛するきっかけの一つだろう、いのちについて。

愛された彼が何を語ったのか。そもそも何を以て愛されたのか。

もちろん第一の理由は『話した内容』じゃなくて、『自分に話してくれたこと』 자체なんだらうけど。

本筋でない、益体のない筈のそれが今、何故だか無性に気になつて。

「何をしてたら命なのかしら」

詠うように続けた言葉は、果たして。誰に向けたものだつただろう。

間近で水を差す一言もなく耳を傾けてくれた彼にだらうか。

それとも。

あの月に、命の明かりが一つだけ燈つていた時代の契機にだらうか。

視線を戻すと、彼はどこか遠くを見ている——いや、何処も見ていらない。

雰囲気から察するに、無視された訳でもなさそう。注意深く目を覗くと、焦点が合つてないのが確認できた。

さつきまでのわたしみたいに、外界を観測する器官を疎かにしてでも、内側に没頭している。

何度か目を瞑つているのは、区切りをつけて頭の中を整理してゐるのか。

その姿に、望んだ答えが得られそだという予感。つい期待を膨らませる。

そのままじいつと見つめながら、彼の言葉が返つてくるのを待つ

た。

「…………うん。これなら、いいかな」

ぱちりと瞼を開いて、分かりやすいよう要点を押さえた一連の流れを見返して再確認。

該博と呼べるほどの持ち合わせはないが、幸い多少の知識の蓄積はある。

知っている限りは応えてみようと、渴きかけていた唇を軽く舐めた。浅く一息ついて呼吸も整える。

思考中には気付きつつも放置していた視線を改めて見返すと、余程に待ち侘びていたのかこちらを凝視する少女。幸い傾聴する準備は万端らしい。

遠い昔。彼女の祖が聞いたという生命の定義を、執筆の幕間として今度は自分が語り聞かせる。

◆
「ヒトが死を怖がるのは死にたくないからではない。変わらなくてはならないから、終わってしまうことを怖がるんだ」

人間がなぜ死を禁忌するのか。生命は変動を原則とする。

我々の体を動かす神経はシナプスによつて繋がれている。肉体にかかる負荷を全て電気信号に換算し反応を返すこれには学習機能があり、受けた情報を『傷』として根幹に刻み込む。そして類似した刺激を受容すると経験から平均値を算出し、差分によつて応対の度合いを変えるのだ。

ありとあらゆる現象を未知と目を輝かせ、一秒ごとに既知と落胆していくあり方。

自身を媒介に起きた事象全てを記録し、掘り進む行為で穴を埋めのかのように内面を塗り替え続けていく。

我々は根本からして、『一瞬前の自分と変わる』ことを前提に設計されている。

「特に増えるという変化は重要だ。子供を作る、という事はそれ自体の経験に加え、自分の遺伝子の配合^{ブレンド}、転換を意味するからね。

本来生き物は子供を作った段階で用済みになる。

まだ刺激を受け取っていない無垢な複製が生まれた以上、使い古した肉体を生かすのは資源の無駄だ』

自分にあつた異性を選ぶ、より美しい配偶者を求めるのは、心による働きではない。自分の複製に、より幅広い受容性を持たせるための本能だ。

数だけを求める能率を第一とするのなら、わざわざ^{つがい}番を求める掛け合わせずとも同一の分裂^{コピ}で事足りる。

我々は有機でできた電気回路に過ぎない。人間に感情があるのは、それがもつとも効率が良く、また長続きするシステムだからだ。

かつて『汝の隣人を愛せよ』という信仰を掲げた宗教があつた。自然が理のまま正しく暴威を振るい、人が欲望のまま誤った権威を振り翳す地上では、到底受け入れられる余地もない理想論。眞面に考えれば、机上の空論が地上の現実に敵う訳がない。

しかし、結果はこれを上回つた。排斥ではなく受容を基盤とした論法は加速度的に同胞を増やし、最終的には世界の三分の一を手中に収めた最大宗派として君臨したのだ。

感情、知性は人生を豊かにする為のものではない。種^{しゆ}や群^{むれ}が霸權を握る為の、もつとも強い武器に他ならない。

欠陥のない神ではこうはいかない。神は、ただそこにある”だけ

のものに過ぎない以上、安定だけを良しとする。完全のまま生まれた彼らは、そこから進化することはないだろう。

「生命は変わり続けなければならない。だからそれを止めてしまう死が怖くて仕方がない。

しかし子供さえ育ててしまえば、死の幻想から多少は解放される。バツクアップを用意できたからね。

後は勝手に生きればいい。開き直つていつそ死の体験を求めてみるもの、個人の自由だ」

もつとも、地上の人々はその例には当てはまらない。

人類は心が強くなりすぎたのだ。

味見をする際、いちいち料理を全て平らげる必要はない。少量を皿にとつて口をつければ全体の予測はできる。

ほとんどの不思議を自明にした後、残った不可思議も大差ないと察した彼らは種の存続に縛られなくなつた。

自己改革も自己保存も他人事。彼らにとつて変動は、本能や義務ではなく、すでに趣味の領域に変化している。

「それでもまだ、趣味であるうちは救いはある。それさえなくしてしまつたら、私たちは生命とは呼べなくなる」

嘯くように生命の成り立ちを解剖し、そう締めくくつた。

少女はピクリとも動かない。

おそらくは理解しやすくなるよう脳内で咀嚼し翻訳しているのだろう。虚ろでありながら生氣の満ちた、でもピントが合っていない目でやや俯いている。

折角集中している中で腰を折るのも無粋と思い、今日はここまでという事で、早々にその場を後にした。

…………翌日には、放置されたことに気付いて頬を膨らませた少女

を宥めるのに少くない熱意を費やす羽目になるのだが、それはまた
別の話。

宙と海、そして珊瑚礁

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

二人の時はそれから半年ほど続きましたが、終わりはあっさりしたものでした。

彼は彼女を抱えて船に乗り込みました。いきなりのこと驚きましたが、彼女はこのところ弱っていたので簡単に乗せられてしまいます。

影の海を離れるのは不安でしたが、彼がいるのならば喜ばしい。彼女は狭い船の中で幸せそうに目をつむります。

「人間がイヤで、何もかもを見限つて、月に昇つてきた」

声は船の外側から。

今まで誰もこなかつた、これから誰もいなくなるはずの荒野から響いてきます。

「そんな私が、人を愛する道理がない」

体は動きません。

気づいても扉は開きません。

彼女はもう世界^星から離れてしまつたから、世界も動いてはくれません。

星を覆つていた氷は、夢のように砕けていきます。

「君が私に向けている行為は愛情ではないと思う。

単に君が人を知らないだけだ」

彼女は覗き窓にすがりついて、忘れていた掟^{おきて}を思い出しました。あちらの人間に恋をすると、罰として永遠に別れるのです。

「あの地上にはふさわしい相手が山ほどいる。

君はそこで生きればいい」

ああ、彼はここに残るのだと彼女は嘆きました。

同時に。

それが彼にとつて一番いい選択なのだと、理解してもいたのです。

以前の彼女からすればちっぽけな花火。

今の彼女にすれば恐ろしいほどの光と熱を吐き出して、船は地表を離れています。

銀色の大地。

彼女そのものだつた世界は今では他人のよう。ヒトになりかけていた彼女の目には、遠ざかる小さな星。暗い海に独りきりで、きらきらと輝くのです。

でも彼女に涙する時間はありませんでした。

彼は本当にひどい人間で、彼女の安全に配慮していなかつたのです。

船は地球の重力圏に入るだけの燃料しかなく、六倍の重力下での不時着に耐えられる設計ではありません。

船は空で分解し、彼女はそれは悪い冗談のように、真っ逆さまに青い海に落ちました。

それがこの島の始まり。

彼女は一命を取り留めましたが、落下のショックで記憶がところどころ欠けてしました。

島に新しい珊瑚ができたのはこの時から。

彼女はここで暮らし。子を育み生涯を終えました。

ただ、毎月満月の夜になると。

空を見上げては――

幸せそうに笑っていたというコトです。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆

「どうどうどう君の主觀がまじつているね。描写に偏見も」

「好きに書いていいって言つたじゃない」

「別に咎めている訳ではないよ。単なる指摘として受け取ってくれればいい」

「その指摘を活かす場所はあんまりなさそうだけど」

今夜は幾望きぼうの月が天そらの主役だ。空に無数浮かぶ星々も、際立つて巨おおきくまんまるに近い銀の天蓋と比べられては仕方ない。

本番へのお粧ゆかしにはもう一晩掛かるのに、明日への前奏の姿だけでそれ以外の全てが圧倒されているみたい。

脱稿した分を読み進めている彼の言い様にほんのり口を尖らせる。折角のそんな風景を放つてまで執筆してゐるのに、もう少しやる気を引き出す言い回しはできないのか。

とはいえ、怒つてゐる訳じやないけど。

幹に腰掛け、樹の枝に足を伸ばしながら応対するも、視線は原稿に向けたまま。軽く減らず口を挟みつつ、筆が望むままに躍らせ続ける。

そうだ。彼女と彼の物語も、もうすぐ終わる。

いや、違う。とうの昔に終わっていた物語が、わたしの手で息吹を込められ、形あるものとして新生する。

幸いにも、いつか彼が零していった通り「書き始められれば割合ずっと進められる」というのは嘘じやなかつたらしい。

執筆が終わればお払い箱だというのに、ペンは躊躇う事も留まる事も無く、次第にインクをすり減らす。健気にも自分の寿命を新たな物語の種火へと焚やくべながら、舞台を最後へと進めていく。

紙と奏でるサラサラとした音は、ふとした事で霞んで消える程度の、ほんの微かな拍子を刻んでいるみたいで。

二行、
残り三行。

二行、

一行……

「うん、いいかな……」

そうして。

今、ようやく結びを記し終えて、筆を置いた。

「はい、これ最終ページ」

「おお——！ ありがとう。お疲れ様」

感極まつた風に弾んだ声。

手渡そうと向けた原稿を丁寧ながらも素早い所作で受け取る彼の姿が妙に可愛らしい。

このはしゃぎっぷりを見るに余程お楽しみだつたみたい。ここまで感無量だと筆者冥利に尽きるというか……うん、予想外の面倒事も悪くない。

水を差すのも野暮だろうし、食い入るように読み耽る彼をしばらく放つておいてあげることにした。

…………わたしが先日放置された時の態度は、気にしない方向で。

「んー……」

なんとか成し遂げた達成感と開放感に身体を預けていると、ソラに浮かんだ月が思わず目に留る。

真円というには、まだほんの少しだけ欠けた天の珠。

僅かに陰りを残しながらも、ついため息を零すほどに冴え渡る銀色。

彼と彼女が出会い、そして別れた物語の舞台。

誰の目にも映らない月の裏側で起きた、ほんの幕間のできごと。

「綺麗な月……明日は晴れるかしら」

未だに一面に光が行き渡らない不完全な威容だけでも、満月の時の絶佳ぶりが見て取れるよう。

星の命が燃える音も吸い込むような、どこまでも深く暗く、しんと静まつた夜空も。

そんな夜空ですら覆い隠せないくらい鏤められた星も。平時ならどちらも主演を張れそうだが、今はダメだ。とても足りない。

闇は光を浮き彫りにし、光は更なる光輝を引き立てる。かけがえのない持ち味の全部が全部、貫禄に満ちたあの銀を盛り上げる端役に見えててしまう。

今夜は行方知れずの雲も本番当日に所在なきに漂うよりかは、ぜひ空気を読んでそのまま引っ込んでいてもらいたい。ましてや水を差すなんて言語道断だ。

何せ月は幾多の星と違い、纏つた衣装で十全と輝けるのは一夜だけ。

刻むように三十日分の暦を費やして天満ちりばに至る。あんなに目映く光のも、一晩限りだからこそと言われば納得だ。

やつてているのはかつての人類と同じ使い回しなのに、ただ節約の為に使うか、溜めて溜めて使うかの違いだけで、大した贅沢になるものだと思う。

そして明日はその満月……つまりわたしはまる一ヶ月、この二色の人間に物書きを教えてもらつていたことになるのね。

はじめこそ彼の姿に面食らつたり、会話のすれ違いに戸惑つたけど、おおむね刺激的な時間を過ごせた。真っ白な瞳孔は光も何もかもを遮るようで、奥深くは見通せないけど。

彼は眞面目で。

好奇心旺盛で。
なにより正直だった。

はじめから、夢と現実を区別しない生き物のように。

「—— 読了した。感想を述べてもよいかな?」

「ひや、はい!!」

不意打ち気味に訊ねられたのに、計らず声が上ずった。
ぎこちないままにささつと居住まいを正し、背筋を伸ばして身構える。らしくなく緊張しているみたい。

「どうぞ。お手柔らかにお願いします」

「大変に楽しませて頂いたとも。

月やこの島の成り立ちを知られたのも面白かつたが、恋愛模様も見事だった。

特に、この彼女は実に可愛らしい」

「そうかしら? 少し無防備というか平和すぎると思うんだけど、どのへんが気に入ったの?」

「行動に揺らぎがないからね。とても正直な人だつたんだろう。

周りに振り回されなかつたのは、自分を曲げてまで嘘をつく意味がない程まつすぐだつたからだ」

その言に。
少しだけ、心がさきくれ立つた。

褒めてくれている筈の言葉にも拘わらず、妙に刺々しい気分。
それが八つ当たりに近いと半ば自覚しつつも、口から溢れる言葉を止めようとは思わなくて。

どこか口調が荒くなつたまま、咎めるみたいに言い募る。
「ずいぶんと肩入れするのね。

そんなのわたしの本だけじや断定できないのに」

「できるよ。ひとかけらの無念も見受けられなかつたから。
彼女の記憶から読み取れるのは、最後まで自分の選択を誇つた事実

だけだ」

「………」

そんなつもりはなかつた。

むしろわたしは反感をこめて筆をとつていたはずなのに。

…………そう。子供の頃からおばあちゃんの話には疑問があつた。
わたしから見ればこのお伽^{ときばなし}噺^{ばなし}はひどい物語だ。

尽くした末に捨てられたのに、どうして彼女はあんなにも幸福だったのか。

裏切られてもかまわない献身が愛だというのなら、わたしはやつぱりそういうものとは反りが合わないと思う。

腑に落ちない思いで胸が詰まつて。

尖らせた口のまま、納得のいかないままに食い下がつた。

「わたしは、悲劇として書いたつもりなんだけど」

「彼女の主觀は君の主觀だよ。君たちはそういう生き物だ。

純粹無垢な複製でありながら、祖先の傷^{おもいで}を継承する珊瑚の姫。

母方の記憶を自分のものとして受け継いでいる。

過去は変えられない。事実の解釈^{してん}は異なつても、想つた心は覆らな
い。

君がどう思おうと、君の遺伝子には原初の気持ちが刻まれている」「
何より、と前置きして。

「仮にこれが悲劇であろうと、『悲劇と思うかどうか』は読み手の自由だ。

この物語を、

『人と人でないものが共にあろうとするのは難しい』という異なる
ものとの教訓とどるか、

『完全故に届かないものを求め、それを失つた愚かさ』という身に余る渴望の末路とどるか。

それとも。

『恋い焦がれた一人の為に、自分の全てを懸けられる愛の強さ』という恋の物語とどるか、ね。

大事に大事に中に囲い、欠ける程我が身を食ませるのも当然だ。
『夜光何徳 满ち欠けを繰り返し 彼に何の徳があつて その腹に兎を飼つているのだろう
死則又育 菩提心をもつて 月は何の徳があつて その腹に兎を飼つているのだろう
厥利維何 而顧菟在腹』……なんて知れたこと。

そんなの、月が兎に惚れてしまつたからに決まつている。

君にはともかく、私にとつてこれは本当に素敵な恋の物語だとも「…………」

(この男性はひどい人物ですね)
(そうでしょー)

自分の裡に鳴り響く声が聞こえる。昔々、おばあちゃんに語り継がれた時から抱いていた感想。

所感を口にしたあの時、祖母は笑つて流してくれたけど。内心ではどう思つてたんだろう……？

それが、妙にばつが悪くて。
「…………よく分からないけど。

お眼鏡にかなつたつてコトでいいの？」

胸中に走つた思いを振り切る為に、口ごもりながらも結論を出すよう急かしてみた。

逃げるみたいでシャクだつたけど、実際そうだからしようがない。「私の期待とは違つたが、それ以上のものを頂けた。

お気に入りの一編だよ」

「期待？ 何を期待していたの？」

「珊瑚の話。

どうしてこの島の珊瑚は光るのか、月の珊瑚の裔である君ならば、

詳細な知識を受け継いでいるかと思つてね。

……物語の主題からは外れるけれど、もしよければ伺つても
？」

この島特有の、満月の夜に光る珊瑚。

都市部の人々に言わせれば、あの珊瑚たちは、周期的に大量の酸素やら窒素を生み出しているという。

結果として少しだけ人間の歴史を延命させているそうだ。

……しかし『伺つても?』なんて言われても。

「今までその価値を聞いてくる人はいたけれど、なぜ光るかなんて聞く人はいなかつたわ。

大体『何故?』なんて……考えたこともなかつた

「なるほど……君たちにとつて明かりを灯す珊瑚は当たり前のものなんだね。

もつとドラマチックな背景があるかと思つていたけれど、あの発光は単なる偶然の産物なんだろう。こういつためぐり合わせもあるのだと解釈する

そんな風に、本来納得いかないだろうことも“たまたまそうなつただけ”であつさり納得しちやつたみたい。なんというか拍子抜けというか。好奇心旺盛な割に探究心は控えめというか。融通が利き過ぎるというか。

そんな彼に、ちよつとだけ呆れていたから。

「この一編、是非とも貰い受けたい。

事後承諾気味だけれど、お代は如何いかほどかな?」

「…………えつ」

いきなりの申し出に、つい二の句に詰まってしまった。

そんなことを言われても、その、困る。何か払うだけの価値がある……と認めてくれたのは嬉しいけど、別に欲しいものなんてないし。頼まれたから書いただけなんだから、ただであげちゃつてもいいんだけど。

刺激的なこの一ヶ月で満足と言えば満足。…………何より、あんなに楽しそうに読んでくれただけでわたしには十分だった。

ただ―― そんな返事はお気に召さなかつたらしい。

彼は難しそうな顔で、

「む……流石に無償、というのは気が引ける。ほぼ丸一月費やしてもらつての一品だからね。

そうだな……一日。また明日伺うので、その折までに何か考えておいて貰えるかな。可能な限り対応してみよう

以前のように知識を教授してもいいのだし、それまでは……と原稿を手渡される。

「ではまた明日に。おやすみなさい」

今まで何度も見ていたけど、彼の魔術？ というものらしい。ふわり、と浮き上がつて立ち去ろうとする。

風に揺らされてどこか危なげに見える遊泳。これでも生身で行きたい所まで行けるらしくて、この島にもこうやって来たのだと言っていた。ちょっと積極的な空中の海月くらげみたいな人である。

「え!? ちょっとつ

「? 何か？ 欲しいものでも思ついた？」

そうして躊躇いなく飛んでいこうとする彼を、何故か反射的に呼び止めた。

とはいえた嗟とつさに引き留めようと出た言葉だから、思考の方は咄嗟には追いついてはくれない。

勢いに押されただけの漠然とした感情のまま、無理矢理間を持たせるみたいに、振り返った彼に問いかける。

「……本の評価をまだ聞いてない。

それで、点数は？

その言葉に、どこか後ろめたそうに苦笑した顔を伏せて、

「いやだな。意味に価値^{てんすう}なんてある訳がない。私には荷が勝ちすぎるよ」

そんな、よくわからない言葉を残して、彼は西の空に消えていった。

初めて聞いた、人間らしくない声だった。

魔術

願いの対価とその余祿

今年の寿命も数えるほど。

十二回目の満月の夜。

今夜は一段と明るい海。吹く風は温かくも冷たくもない。冬という季節は、この島には無縁のモノなのだ。

「空に水。水に空。月の空には碎け散った海がある」

この島に縁が蘇つたのは、島の近くに隕石が落下してからだとう。

そうして出来上がったのが、月の珊瑚と呼ばれる新しい海洋世界。最初のおばあちゃんが海に入つたまま戻つてこなくなつて以来。月のいちばん見える夜、珊瑚が光るようになつたらしい。

「星はまたたく。海はさざめく。人恋しくて珊瑚は謳う。

わたしたちは海月みたいに、ふわりふわりとその日ぐらし」「おや。今夜はまた、一段と元気そうで」

白黒の彼はふわふわ浮かびながら現れた。
かすかな光を撒いて舞う姿はちょっとだけ鱗粉のよう。

昨日は空飛ぶ海月みたいだと思つたけど、こうしてみると蝶々の方が近いのかも。一度そう考へると、真っ白な体躯に浮かぶ様に纏わりつく黒色も相まって紋白蝶もんしろちょうを連想させてくる。

わたしが元気なのは、月の満ち欠けの影響だろう。気持ちの問題もあつて今夜は特に調子がいい。

「はいこれ。わたしの本、受け取つて」

「ありがたく頂戴しよう。

…………それで、何か対価ねがいは考へついた?」

「それは正直思いつかなかつたの。でも、だからこそ思いついたコトがあつて」

「？」

言葉が前後で矛盾しているかもしれないが、本当のことだ。

あれから一晩かけて願いを模索してみても、わたしには結局欲しいものなんて見当たらなくて。

折角だから求婚の際の難題でも出してみようかとも思つたけど、改めて見返すと、それは別に欲しくもなかつた。

そこで。

「昨日、知識でもいいって言つてたでしょ？」

「ああ、言つたね。――つまりは、何か知りたい事でも？」

「相談事があるの。意見を聞かせてくれないかしら」

報酬というのはそれだ。昨日あれこれ考えたあげく、求婚について相談することにした。

島のしきたり。御簾越しの逢瀬。常識はずれの交換条件を突き付けるコトをどう思うか。

何より。

今まで求婚者達に散々提示してきた難題が、なぜか『欲しいもの』として思い当たらなかつた事。

自分自身でも理解できないそれについて、彼なら、是非を問うてくれると思つたのだ。

一通り話を聞くと、感心したように、
「君の祖の物語は月の天女のようだと思つたけれど、裔すえの君はかぐや姫だつたか。

何とも口マンスに溢れた一族だね、君達は」と、軽く感想を述べた後。咀嚼するように微かに首を上下させる。
「一つだけ確認したい。件くだんの難題の品についてだけれど。
その言いぶりから察するに、君は、それが欲しくて欲しくて仕方がない……という訳、ではない？」

そうして再度口を開いたと思うと、問い合わせの回答を告げるのではなく問い合わせへの補足を求めてきた。

疑問に対し首を縦に振る。もちろんそう。

わたしは今まで述べた難題のどれか一つでも、心から追い求めたことはない。

…………断る口実と見受けられるのも、致し方ないとと思うけど。

煙に巻かれた、と憤慨して立ち去る者がいた。

出来る訳がない、と悲嘆にくれて踵を返した者もいた。

命には代えられない、と我が身を惜しんで諦観を浮かべた者もいた。

た。

彼らの愛を蔑ろにしていると、唾棄されても仕方がない。

でも、わたしは誓つて真剣だ。

難題を踏破できた暁には、この身の全てを捧げるつもりでいる。

それを踏まえた上で、彼はこう言つた。

「君は誠実なのだろう。

愛することに理由を求めるのは、愛することをやめないよう繋ぎとめる理由を望むのと表裏で同義だ。

愛に理由がないのなら、次の瞬間愛しい誰かがなんでもないその他大勢と同じになってしまふかもしれない。

愛の不在証明を、愛なしでは為し得ぬ難題の背理を以て覆す。

自分の一生を捧げるのに、相手の一生を求める……というのはそういうコトだ。

一生分の愛を込めてカタチにできるなんて。君は、とても情熱的なんだね」

…………こんなセリフを微笑み交じりで全く裏表なく告げられた。

正直、ちょっとだけ照れる。

褒められて嬉しいような、それでいて内訳が見当外れでくすぐったいような。

第一、情熱的と言われても困る。

わたしは愛を知らない。わたし以外にはあるらしいけど理解ができない。

システムのように相互補助の安定がある訳でもない。

安心も打算も組み込まれた、明確な作業として現実に現出させられる訳でもない。

そんな不確かだから。わたしは愛を信じられないから、愛を証明して欲しいと思つてたのに。

そんなあやふやな感情、自分にはないものだと――

……そうやつて内面に疑問を投げかけるわたしを眺めつつ、彼はふむ、と顎に手をやる。

「もう少し、君に知恵を貸そうか。

何故、君は愛を信じられないのか。私にはわかるよ」

声を掛けられるまで気付かなかつたけど、どうやら続きの思慮を巡らしてくれていたらしい。
声色には自信ありげな響きが詰まつてゐるし、納得がいく形に解釈が出来上がつたみたい。

でも……愛が信じられない理由なんて、「明確な形がないから」「現実的でないから」以外があるのかな?

そのどつちか一つでも、信じない根拠には十分だと思うのに。

「愛」というのはつまるところ、二面性のある万象から都合のいい半面だけを取り出す前向き思考の詩的表現だ。

時代はもう歩みを止めているからね。前向きだろうが後ろ向きだろうが、一步も進んでいないのなら変わりないさ。

ああ、だから…………

つまるところは。

そんな疑問は、彼にとつてはたつた一言だけで表現可能な、わかり切つた問いかけだつたらしい。

「君、『幸せになりたい』って思ったこと、ないだろう？」

一瞬。

きよとんと、何を言つて いるのか分からなくなる。

……『幸せになりたい』と、思つたことがない？

……確かに、そんな願いを抱いたことはないけど。

それのどこが、愛を信じられない根拠になるんだろう？

◆ ◆ ◆

返答に目を点にする少女を見て、最初に問われたこちらのほうが驚いてしまつた。

……そんなに衝撃的な回答だつたのだろうか。

愛と幸福は手段と目的という対応軸を持つ以上、愛と価値を結び付けるよりかは、飛躍の度合いは少ない筈なのだが。

しかしどうにも得心いかないらしいご様子。まるで口に入れただけのものがすつと消えてしまつたかのような、力いっぱい霞を噛んでしまつたかのような、難しい顔をしている。

なに、丁度いいと言えば丁度いい。余禄^{よろく}とはいえ対価の内だ。少々

説明を長めにしても罰は当たらないだろう。

少しばかり清聴願おう。

愛とはなんであるか。

愛とは何のためにあるのか。

愛とはどのような事象か。

愛おしみ、慈しみ、それを以て喜びとする、その行動原理の根幹。



「愛とは畢竟^{ひつきょう}、幸せを手に入れる為の、知性による最適な手段のことだ。

この世で最も割のいい取引は強奪だが、最も能率のいい手段は同化なんだ。

いのちについて話した時、『愛情がもつとも効率よく長続きするシステム』だと言つただろう？

私達は他人事にもかかわらず、『まるで自分のことのように』錯覚できる共感機能を持つている。

これが道徳の上で“徳”と呼ばれるものだ

子を育む親が代表的だろう。繁殖に背を向けた現代では希少かもしれないが、一昔前では誰もがそうだったと聞いている。

自分の食べる分を削つても、子により多く、よりおいしいところを食べさせる。

そうしたところで自分の腹が膨れる訳じやない。むしろ取り分としては明確に減つていて。

でもそれを当たり前のように良しとする。愛しい誰かの笑顔を見るために、躊躇なく己を犠牲にする。

その一見どうしようもなく理不尽で、しかし内実非常によくできた

システムこそが。

長く永く、人との繋がりを諍いや鬭争といった負の面でなく。

博愛や恋慕などの正の面として、美しい景色を築き上げてきた。

「とある宗派で金科玉条とされる『汝の隣人を愛せ』、『汝の敵を愛せ』とはそういうことだ。

敵すら我が子のように愛せたのなら、仮令相手に奪われたとしても、それは略奪ではなく献身に変わる。

本来なら、現実的に見たのなら耐え難い、どれだけ理不尽で横暴な所業だつたとしても、そこに愛があれば歓迎に値する事象にすり替わる。

自分の食事を減らしても、子により多く与える親子の営みと同じになる」

それは当然の帰結と呼べた。カツチカラコツチにコピーペーストの方がデータは増えるという、当たり前の論理。前後不覚の酩酊。己と他者を区別しない錯乱。一方通行の共益。梵我の境と律を取り扱うことこそ最適解だ。

幸福など所詮、脳が垂れ流す麻薬の幻覚を小奇麗にリパッケージした名称に過ぎない。

愛も幸福も物質に依存しない精神現象だからこそ、その現象は物質的な資源を用いずに起こすことができる。

そして。

それを可能にする知性こそが、人と獸を異にする唯一にして絶対の違いである。

「君は愛が理解できないと言つたが、理解に苦しむのは幸福だつて同じことだ。

愛も幸福も、それを感じる肝心要の『心』 자체が取り出したり分析できない、実体のないものなのだから」

「この愛は実在はしても実体がない。」

カタチ 実体のないものに干渉するのにそもそも物質などいらない。

幸せはモノの有無に左右されずになる事ができる。

同時に。幸せになるのにモノはそこまで役に立たない。

…………こんな、ある意味では救われて、同時に救いようのない結論を得るまでかつての人は歩みを止めなかつた。

そして止める術さえ手中に収めてしまえば話は単純だ。『横暴によつて奪う』事による負の繋がりから『自主的に捧げる』正の繋がりへの転換。

ひたすら食い荒らす獣か、ただただ貪り尽くされる餌か。弱肉強食の掟に縛られ、どちらかに属することを強いられるこの地上で、それは正しく天啓に等しい『発明』だつただろう。

星に蔓延^{はびこ}るだけだつた獣を、『人』に変えてしまうほどに。

「かつての人間はやる気に満ちて業突く張りだつたから、不幸を無駄に抱え込むリスクをしよい込んで、幸福の総量を増やしたいと思つていた。

だからかつての地上には愛が溢れていた。情熱を資源として惜しみなくとめどなく、際限なく欲望として消費し続けた』

人が誰かを愛すのは、それが幸せになれると本能で知つているからだ。

人が誰も愛そとしないのは、それが楽だと理性で解つているからだ。

幸福を増やしたければ人を愛すし、不幸を増やしたくなれば愛すのを止める。

やるもやめるもコストは一切かからない。だつてその本質が、どこまで行つても錯覚に過ぎないのだから。

……実際は、『コストはない』とは言つても、それはあくまで杓子定規な理屈の上だ。

幸福を共感するような相手なら無論、不幸も共有してしまうことも

往々にしてありえる。

我が子が膝を擦り剥こうものなら、我が事以上に慌てふためく。紛うことなく他人事なのに、不要なまでに親身になり過ぎている。

傷付いたのは決して、自分ではないのに。

一度情を抱いてしまつたら、それにしがみつく未練を断ち切るのは難しい。

それが状況が変わつて不幸しか齎さなくなつたとしても、溢れんばかりの情熱を注ぎこんだ以上は、それが冷めるのにも時間がかかるのは道理だつた。

今は違う。現代の人類は、未練が胸中に過ぎることがない。それは諦観でもあり、初心に帰つた結果もある。

そもそも幸福を希求せず、結果不幸を自分の持ち分以上に抱え込むこともない。

愛し愛されも気まぐれに。錯覚から現実に回帰するのも躊躇わない。

「錯覚と言うよりかは、夢かな。夢から覚めるのに抵抗を覚える人がいないように、覚めたまま微睡まどろむことも無く、期待も希望もしなくなつた。

夢に溺れるという文化も遙か昔か」

イデアの頃から、容量や合理という制限付きの現実では枷のない空想に及ばないとされたけれど、まさか現実が理想を上回るとは。

事実は時に幻想ファンタジーをも凌駕する。ともすれば突拍子のない妄想よりもほど奇天烈だ。この地上が神の奇跡の体現と称されたのも頷ける。

神の妄想が世界というのなら、人の妄想である夢程度が及ぶ訳もなかつた……と言つてしまえばそれまでだが。



睦言でない愛を語る彼の解説。

流れれる様に紡がれたソレに、ふと想起するのはアリシマの君。
十一回目の満月の来訪者。一番新しい求婚者。

わたしを、あいしているといったひと。

御簾越しに自分に向けられた言葉を覚えている。

『私の「愛」は貴女だ！』

『貴方のための献身！ 貴方のための労ならば、それはむしろ喜びとなるでしょう』

これを見合いの席で聞いていた時、わたしには意味が分からなかつた。

自らを使い潰されることを望む身投げ行為。己を薪と焚^くべるが如き尊厳の放棄。

口説き文句にしても整合性がない、システムの様な安定もない不可思議を、臆面もなく口にするものと。ずっと訝しんでいた。

でも、今。

それがどういう意味を持っていたのか、俯瞰するような視点を得て初めて理解する。

彼は、わたしと添い遂げたいと。一つに交わりたいと言ったのだ。

それは肉ではなく心の媾^{まごわ}いだ。

ずっとずっと。人間が何千年も続けてきたこと。

人が獸でなくなつた時から、ずっと。

裏切られてもかまわない献身、その行動原理の根幹。

愛。

かのじよ
星が、人を目指すに到つたもの。

「」

言葉にできない全能感に知らず身を震わせる。

長年とっかかりすら見えなかつたパズルが思いがけない切つ掛けで解けてしまつたような陶酔。

じぶん
内面を通じて外界を見据える瞳にかかつていた靄もやが晴れたような爽快感。

咀嚼しきれず猥雑に歪曲していた理解と現実が噛み合つた達成感。それに伴う認識世界の拡張。

変化し続ける事が宿命づけられた生命の、愛をも超える最大の行動原理の発露。

未知を既知に塗り替える事でシナップスを切り刻む、ミクロスケールの自傷行為。

今真に思い知る。知るという行為自体を知る。

最初の祖母も月の影で、同じものを授かつたのだと。

…………ただ、惜しむらくは。

それを「たの愉快」と形容するなんて経験が、未だ少女の中になかつ

た事だが。

◆ ◆ ◆

「…………満足、いただけたかな」

「うん」

そう返しつつ、満面の笑みで微笑みかけてくる彼女。…………その顔を見れば、問うまでもないと分かつてもいたが。

あれからしばらく、人心地つくまで時を挟んで。

それでも尚、未だ感動冷めやらず、といった風情で佇んでいる彼女。この夜空に負けない程晴れ渡った、きらきらと輝く表情。楽しくて楽しくて仕方がないらしい。

その面持ちから、先程の問いは彼女の 中でも根幹に近い要素を占めていたのだと推測する。

無理もない。何せ生命の原点だ。

そして彼女にとつては、彼女に至るまでに祖が辿った道のりでもある。

人を愛し、人を求める、永遠を捨て去った、月の珊瑚の軌跡。

今まで腑に落ちなかつた長年の疑問がすっかり氷解したというなら、感動も一入ひとしおだろう。

かつて。月に張られた空の氷が、跡形もなく砕けた時のように。「本のお代はこれでいいわ。十分面白かつたから」

「それは重畳。いい取引が出来たよ」

受け取つていた本をようやく自分の物にできた事実を噛みしめる。外套を広げ、袂の内側にゆつくりと本を押し込んだ。すると、たちまち本は水面のように波紋を立てる布の影に沈んでいく。

一連を打つて変わつて驚いた顔で見つめる少女の顔が少しだけ恥ずかしく、少しだけ誇らしい。してやつたり、といった気分。

この外套の中は異空間と化しており、自在に物の出し入れが可能なのだ。彼女が執筆の際用いた文机もここから取り出したもの。着の身着のままで好き放題に各地を彷徨^{うろつ}き回れるようになると術式を組み上げ織り込んだ、自慢の一品である。



さて。これからどうしたものか。

目当ての品は手に入れた。詳細こそ明らかにならなかつたが、知りたかつた珊瑚についても訊けた。

何もかもの切りがいい。悪くない。この因果の廻り合わせに。ピリオドを打つにいい頃合いだ。

この島に、逗留^{とうりゅう}する理由はもうない。

…………その事実に、らしくもなく未練を感じた。“何処に”感じているのかは――具体的には分からぬが。

仮に後ろ髪を引かれるところがあれど、所詮は食べ終えた皿を名残惜しそうに眺める感傷に過ぎない。…………筈だ。

未知を明かした以上、また別の未知を求めるのは生命の本能だ。生きることは変わること。外部の何かを攝取^{たべる}すること。それにわざわざ逆らうような真似を、今まで私はしてこなかつた。今まで廻つた場所全てでそだつた。

ならば。今回もそだらうし、そあるべきだ。再びふらふら漂いながら、目新しいものを見つけるなりを待つのがいいだろ。少なくとも、ここに立ち止まり、足踏みを続けるよりかは建設的だ。

…………なのに。当然すぎるその結論を、奇妙なほどに出し渋つ

た。

裁決が下る寸前で踏みとどまっている。蟠りを蟠りのまま維持している。

それを他ならぬ自分の意思で行つてはいるという事実に、思わず首を傾けて。

——本当は、気付いている。

——それでも。私は、それを我慢できないから。

——他の誰もがそう形容しようとも、私だけは。

——それを■だと言つては、いけないのだ。

声にならない苦笑が漏れた。悲嘆の色はなかつたと思う。ただ、心底から呆れただけ。

自分がどんな生き物だったのか、思い出しただけの話だった。

ああでも、もう少しだけ。

それ位のわがままなら、きっと自分も許してくれる。
わたし

だから。

さしあたつては。そう。折角あんなにも美しいものを見せてもらつたのだから。

あの笑顔の対価位、追加で支払つてもいいだろう。

「少し、いいかな」

「? なに?」

別に彼女が望んだ訳でもないし、そもそも必要の有無の相談すらし

ていない。これは私が自発的に行う等価交換だ。

更に言うのなら、私が彼女に返せるものは虚構うわくだけだ。輪をかけて完全な自己満足である。

今からすることは、決して大それたことではない。
幸か不幸か。ああ嗚呼、本当に幸か不幸かなんて、知れたものではないけれど。

生憎と今の自分には、大抵の奇跡が思いのままだ。

だから、こそ。

全く——本当に価値がない。

「なに、大したことでもない——」

つまるところは単純すぎる。ただそうできる機能があるからやつてもいいと。

そんな、思いつきの様な気軽さで。

それを定めた愛を求める理念も。

今まで誰もが及ばなかつた困難さも。

それを承知で追い求めた者達の無念も。

そんな事実を何もかも鑑みる事なく、省みる事もなく。

君の難題、解いてみようか

前人未到、神聖不可侵の聖域を。
どこまでもなつていらない、徒いたずらな気構えで、
跡形もなく踏み躡にじると宣言した。

虚構も時には欲される

その宣言に束の間、一度だけ正気を疑つた。

それがわたくしか彼のどちらかであつたかは、判然としないけど。

耳に届いた言葉を言葉として認識できない。

否、認識したからこそ、その指示示す意味を理解できない。

別に熱に浮かされた訳でもないのに、妙に頭の廻りが悪い気がする。

言葉の金槌で頭を横殴りにされたような錯覚。質量なんて綿菓子より乏しい筈なのに。勢いなんて今まで綴られた愛の語らいより緩やかだつたのに。

こともなきに口にされたそれに、酩酊したように視界が揺らいだ。

「…………、え？」

口から洩れたのは、そんな間の抜けた声だった。

他ならぬ自分の呌きで意識を取り戻す。気が付かなかつたが、思わぬ申し出につい絶句していただしい。

…………でも、これは仕方ないとと思う。

今まで誰もが匙さじを投げた無茶無謀を、こんなにあつさりと熟こなして見せると断言されたのは初めてだつたんだから。

余りにも淡白に。氣負う素振りも感じさせず。

その気安いまでの口ぶり自体もだけど、何よりも驚いたのは。

久しく忘れていた求婚者への難題を、他ならぬ彼が望んだこと。

この一ヶ月の間、彼をずっとそんな日で見ていかつたものだから。

今更それを他ならぬ彼が、前触れもなく口に出す事について。まるで裏切られたような、割り切れないような。そんなもやもやも浮上する。

「え、えと」

口がまごつく。舌が喉内に絡む。ええい、落ち着けわたし。

今、大事なのはそれじやない。捨て置くつもりもないけど、とりあえず今は脇によける。

すぐに、真っ先に確認しないといけないのは――

「難題、つて……解けるの？」

風船が萎んでいくような、今まで丸々と見栄えだけが立派だつたものが、内側から崩されていくような。

漏れ出たのは、それこそ風船から時間とともに微かに、だが確実に零れていく気体の様な、そんなか細い声だった。

確かに自分が出した声なのに、本当に口にしたのかも覚束ない。自分の喉から出た筈なのに、向こうに届いているかどうかの自信もない。

今まで堂々と課題として提言しておいて何て言い草と思われるかもしれないけど、そんな自分をして畠然となる程、緊張した素振りもなく言われたらやむを得ないと思う。

「まあ、私ならね。恐らくは可能だろう。

そこで何か、私にも一つ出してみてはくれないか。話はそれからでも遅くはない」

遅くないと言いつつ『出来る』と断言する彼に少し愕然とする。まだ詳細を聞いてもいないのに、どうにも自信があるらしい。

とん、と胸を叩いて待ち構えるその姿にはあきれるやら頬もしいやら。

そんな内心の糺余曲折はありつつも、何はともあれ。聞かせるだけなら問題ないということで。

他にどうすべきかもわからなかつたから、お望み通りに告げてみることにした。

「えつと、じゃあ……、……月のサカナを用意できる?」

…………流石に想定の範囲外だつたのか、耳を疑つたように口に手をやり、少し首を傾げる彼。

「それは何かの謎掛けか比喩表現? それとも、字面通りに解釈していいのかな?」

「文字通りの意味で大丈夫。一番新しい求婚の時に出した難題なんだけど」

なんて、こちらの発言が何かを疑うような、胡乱な目を返された。もちろん中身も外身も間違えてない。無理に勘織らなくてもけつこうだ。

詳しく述べた件について、騙し討ちみたいな気がして妙に後ろめたい気もするけど、それ以上にしてやつたりな気分もある。さつきの外套の時にやにやした顔は忘れてない。不意打ち気味の宣言の意趣返しにもちよどいい。

そんな風に。

いくらなんでも、少しは物怖じなり、諦めを滲ませるなりするかと思つて待ち構えたのに。

「そうか――では、やってみよう」

わたしの耳に届いたのは、またあっさりと口にされた、そんな気軽な宣誓だった。

◆ ◆ ◆

すつ、と海に映つた月に向かつて手を翳す。

それが今、地上で自分だけが為せるであろう奇跡であろうとも。そんな成果が紙切れ数十枚の対価として見合わなき過ぎるという客觀も。

そういう了些事は何一つ告げず、ただ望みを形にする。

魔術回路のスイッチを入れる。起動のイメージは鳴り響く鐘楼。
時の流れを刻み、年の終わりを告げ、そして新たな始まりを謳い上げる転換の象徴。

耳を劈くほどの勢いで鉛という音を響かせたのを合図に、自分の肉体が全く違う装置へと成り果てる感覚。つい一瞬前までの自分と劇的に違う物になる乖離感。

ただその程度のアクションでレールを切り替えるように丸ごと挿す
げ変わる、己が仕組みの精密さ、或いは単純さに確かに誇りと僅かな恐怖を。

自己から生まれながらも受け入れがたい魔力は、その恐れを聞えることなく飲み込むことで精製される。

外部ではなく体内から生じる何かに侵略されると言う矛盾。灯つた熱は宛らのたうつ蛇のよう。体内に根付く回路を通して駆け巡り、丸呑みにせんと蹂躪する。

内側から実体ある血肉を炙りにかかる、廻り回る星の命。そのひとしづくたる生命の火。

あらゆる神話の元となるもの。あまねく存在の鍵となるもの。

いかなる科学でも計測できない熱量に麁^{うな}されるように勢いそのま
ま、

人の扱う神秘幻想、その最奥に至る扉を叩いた。

「命は巡る。生まれる。死に絶える。また生まれる。
はじめとおなじをつなぎあわせてくるくるまわるじゆずのたま
連なる墓標に名を刻み、出来るは骸の高き塔。
いえをもとめてあるきまわるわたしのねどこはどう?
さてはてここでご質問。ここは黄泉路の何番目?」

詠唱を紡ぎ魔術を行使する。科学の前に打ち捨てられ、もはや形骸を残すだけの骨董品といえど、実用性は折り紙付きだ。

駆逐は出来ても殲滅はしきれなかつた、一世を風靡した威光は多少古ぼけたところで小搖るぎもしない。

流れた時の糸を逆再生する事で、月のデータベースにアクセスする。

水面に映つた揺らめく像を媒介に、灯りの絶えた世界の死をなぞる。かつて人間は文明を駆使し、あの天上の星々すらも己おのが領土として宣言した。

一から道を創る必要はない。使う者がなくなつて少しばかり寂れているだけで、とうに経路は繋がつている。

木に実つた林檎と違い、地上に落ちてこない神々の領域という幻想は失われて久しい。

生命の息吹が残らない残骸に抵抗はほぼ皆無。他のどの星より近くて地上のどこより遠い天体の、過ぎ去つた系統樹を辿つていく。

過去数百万年の記録を遡及し、千を数え万を過ぎて億に及ぶ生態系そうざいを総浚そうさらい。

いちいち細かく検分するのも難儀なので、地球の“サカナ”的の大雑把な特性を入力し選り分け開始。

地上のルールで翻訳可能な、概念的に“サカナ”に近似する物をピックアップする。

…………あつた。

歓喜を上げるも内心だけで表には出さない。研ぎ澄ませた表情のまま、それを契機にガチリと方向転換。早速発掘した目当ての生命のデータを転写し、異常識の構造を解析に回す。

構成する原子や基幹となる骨格、それを駆動させ補強する筋肉や器官の仕組みを、自分の知識で成り立つ形で解釈できるようこじつける。

完成形が見えたのなら次は復元の作業。リスト化した必要な原子を魔力で転換し代用。出来上がったものを片つ端から繋ぎ合わせる。二度手間にゴリ押しもいいところだつたが、消費も消耗も省みない。大気に満ちたマナはどうせ、誰かが使うアテもない。折角やる気の有り余る身なので、憚る事無く存分に活用させてもらおう。

そうやつて外装を整え終えれば、後は生命として完成させるだけ。

空中に浮かぶ出来かけの何かは確かな鼓動を刻んでいるが、今は肉が電気信号に従つて脈を打つていて過ぎない。人で例えるなら植物状態だ。

最後は魂の息吹を吹き込むプロセス。なに、取り立てて難しいものではない。死者の蘇生ならまだしも、あくまで過去の存在を現代に再

現するだけ。

人造人間然り、生命の創造のノウハウなんてとつぐに自明と化している。心が宿つたことのない土塊つちくろにすら意思を与えられるのに、サルナの体にできない道理はない。

遠い日に、自然の流れの中でひとつないのちとして成立していたそれを、今度は人の手を以てして、確立させるだけのこと。

「水は生命。土は血肉。空は息吹。
虚数ないは暴かれ、記号ないになる。
枠とびは収める。はみ出こたえたものも。
斯できて全ては箱ななの中なか。外ほかは空つぼ。
四角はこい世界こつたは誰あなたのものだれ？」

呪文を新たに重ねる。

星の生命力を玉鋼エーテルに、個の生命へと打ち直す。

架空要素テルは万物への代用が利く無形の変数だ。

先刻の肉体の構築にも使用したが、本来それは魂などの実体のない

存在を再現する際、より顕著に効力を發揮する。

術式が天を覆う。

並べた歌を媒介とおりみちに、魔力が所狭しと走り回る。

穿ち、
割り、
碎き、
削り、
磨く。

打ち鳴らされる仮想の槌つちの音。

まるで鍛造のように忙しく火花が散り、一秒ごとに光が振り撒かれる。

森羅万象を写し取るインゴットを精鍊し、有象無象の容^{カタチ}を与え、收まる様に叩き上げる。

万物に変動しうる素質^{かのうせい}を意図的に絞り上げ、損失のみを世界に生み落とす劣化変換。

そして。

魔力の明かりも鍛造の火花も、夜闇を貫く月の光も一緒くたに。遙か上回る命の輝きがそれを払い、周囲一帯を照らし上げた。

組み込まれた魂が肉体に適応し癒着し一体化すれば、晴れて完成。月の海が枯れてから久遠を経て、今。遙か異境の地上にて、月のサカナのお目見えだつた。

まるで天からの授かりもののように、空からゆっくりと、地に降りてくる水中の命。

表面は三回りほど大きな零がぐるりと廻い覆つている。穢れを知らぬ幼い肢体を守るかのように包んでいる。

光を零しながら夜空の中で生まれた月の残滓^{ざんし}。

ようやく産声を上げた月のサカナは地上^{人(じん)の目}から見ても美しかつた。

体躯はおよそ六寸程度。月の生命は親に似て色素が薄いのか、白一色で出来てゐる。その一邊倒の色合いに微かな親近感を抱いた。

仄かに月光を反射して煌めくモノトーンの鱗は、生まれたての無垢な魂を顯すかの如く眩い。

一連の作業を終えて、達成感と共にほつと一息。

その感慨は作業の困難さではなく、作業が無事に実を結んだことに對するモノだ。

……正直に言うのなら、月のサカナのデータが見つかることどう

かは半々程度の賭けだつた。

遙か昔の話。伝え聞く第二の魔法使いが討ち倒した吸血鬼は、月の王さまだつたらしい。

太陽系における八の天体と月において、"王"と称される個体は星の意思の代弁者であり、その星全ての生命体を殲滅できる能力を有する。

言い換えれば、比較対象である"王"以外の側の生命もいた筈なのだ。

その中に、地球におけるサカナに該当する種族も存在しただろうと考えたのだが……どうやら的外れではなかつたようだ。いなかつた可能性も加味して、だから半々。

駄目なら駄目で、力尽くで月に母なる海を作つて、原核生物からの進化のサイクルを月向けに方向修正しながら月版のサカナを仕立てる見積りもあつたのだが……魔力の消費は比べ物にならなかつただろう。

別に糸目をつけるつもりはなかつたとはいゝ、無駄遣いはよろしくない。なんとかリーズナブルな方で済んでよかつた——と独りごちる。

…………本人は特になんでもないかのように一連を成し遂げたが、仮に千年前の、魔道に微かでも覚えがあるものが見たのならそのデータメ振りに腰を抜かしただろう。

しかしそれもむべなるかな。力量以上に、周囲の環境が違ひ過ぎる。

西暦にして三千年を数えた現代において資源など有り余つてゐる。人に熱意が消え失せてから、星は長い忍耐の果てにあらゆる自然を持ち直した。

費やす見通しもなく何百年も放逐され、大部分が使われないまま大気に地層の如く積み重なつたそれらは、ただ一人では千年を掛けようと枯渇する事はない。

魔術とは秘匿されるもの。

使う者、広めようと/orする者が軒並み情熱を失つたこの時間軸において、今、この地上でたつた一人の魔術師。

神秘というリソース、太源^{マナ}というエネルギーを罔らざも独占する彼には、物量的な意味での不可能など、事実上消失している。

何はともあれ望み通り。^{オーダー}

ちらりと視線を戻すと、難題を解くと言つた時より目と口を大きく開けたまま、ぽかんとこちらを凝視する少女が居て。

今まで彼女の前で使用したのは浮遊や飛行等、見た目は随分とコンパクトな物ばかりだつたから驚いているのだろう。

放つておくと、いつまでもそのまままでいそうな少女についてい和まされながら。

「――お待ちどうさま。こんな具合でどうだろう?」

事の始まりの時と同じように、意氣込んだところなど欠片もなく。ただただ気楽に気さくに呼びかけた。



「へえ、これが……』月のサカナ』。

やつぱり地球とはどこか違うのね』

あれから意識を取り戻した少女は、てここで私と月のサカナの間近に寄ってきて、ふーん、とどこか素つ気なさそうに生返事を返す。

それを見て他人事なのに心配になつた。本人にとつては、解ける程度の問題の難易度などどうでもいいが、今のが自分以外にとつて

どれだけ困難かを客観的に理解している。

ここまでやつておいてこんな対応では、実際に彼女を追い求め奮起した求婚者達が見たら、やるせなさで頽れるのではないか。

…………が、しかし。今の一連を無為と断じるのは早計だつたらしい。

よくよく見れば、あれは興味がないのではなく、目の前の未知に夢中なだけだ。

逸る気持ちは静められても、そわそわとした雰囲気が抑えられない。

爛々らんらんと輝くその瞳を見て、なんとも現金なものだと苦笑する。

先程は、難題のものが欲しい訳ではないと言っていたのに。

本当——可愛い所もあるものだ。

「…………触つてもいい？」

「いいけれど、一つお手柔らかに。

こちらの重力にも適応するよう仕立てたし、体こそ一人前に出来上がっているが、まだ何の温もりも冷たさも知らない稚魚おさなごだ。

どうか優しくしてあげて欲しい

「うん。わかった」

◆◆◆

彼の許可も降りたことだし、早速その古くて新たな命の姿に触れてみることにした。

水槽と言いつつ、それは四角形ではなく不定形。

実体のある容器に収めるのではなく、中にある水をそのまま拡散しない様、どうにかして緩めに抑え込んでいるらしい。

水風船のように破れたりはしないだろうし、彼がいいと言った以上は大丈夫だろう……と、中と外を繋ぐ入り口を作るかのよう、宙に浮かんだ巨大な零にゅつくりと、けど躊躇いなく指を突き刺す。

大気と水を隔てる表面の膜を通り過ぎると、中の感触は液体とは思えない程軽い。水 자체の体積に押しのけられる感じはあるものの、こちらから押し出す分には抵抗を殆ど感じない。

なんとなく、この水槽を後ろから見ればそこを見てつべんに山なりに出つ張つているような気がする。

故郷のように白い身丈に指をあてがい、驚かせないようにゆつくりと背中あたりを撫でる。

突然のコンタクトに逃げられるかと少し不安を抱いたものの、月のサカナは生まれたばかりで警戒心がないのかされるがまだ。

自分が知る、今までのどんな感触にも似ていらない肌触りを堪能する。

指を介して、どこまでも初々しく鮮烈な、跳ねるような命の音が伝わってくる。

彼に目を移さずひたすらに指を動かし愛でながら、ふと思いついたことをそのまま口にしてみた。

「そういうえば、月つてとても暑かつたり寒かつたりするつて聞いたんだけど、普通に触つても大丈夫な温度なのね？」

「人間が持ち込んだものではない、自然な生命に溢れていた頃の物を復元したとはいえ、検索に用いたサンプルは地球のものだからね。私達の常識かんきょうからそう逸脱しないモノが選ばれたのだろう。

それに、元より月は地球から生じ、分離したものだ。生態系・文化圏が理解できる範疇でも不思議はない」

相変わらず真面目な返事。

詳しい意味は解らないけど、そういうことらしかつた。



全てに平等である時そのものが、過ぎ去る事を惜しむかのように流れの穏やかな一幕。

その中で私は惚けた様に、眼前の光景に釘付けになつていた。

遙かな昔に地に降りたものと、つい先程地に生じたもの。

遠い日に星から消えたものと、新たに星を去つたもの。

それらが揃い戯れる様はまるで、一幅の宗教画にも似て。

その片翼たる、燐光を振り撒きながら揺蕩う月のサカナ。

自身の業を以て組み上げたソレも自信作だが、それに比べて尚麗しいと形容する他ない少女が居る。

どこか色褪せながらも生氣を顕す亞麻色の髪。

肩に届きながらも顔にかかるない程度の長さは、整い過ぎた輪郭のラインをさり気なく強調している。

華奢な体躯を包むカジユアルな服装は、素材の優美さを阻害しないまま快活さを演出する。

細くしなやかで、でも脆弱な印象を抱かせない、何一つ付け加える必要を感じさせない完璧なフォルムの手足。

そんな訳がないと知りつつ輝いているかと見違える、眼窩に収まつたふたつの瞳に。

ふと、磨き抜かれた珊瑚の宝石を連想した。

わざわざ加工するまでもなく壯麗なのに、どうかそれ以上であつて欲しいと乞われ、人の手で丹念に研ぎ澄まされた末の光沢。

自然に満足できない、口出しせずにはいられない——変化を基軸にする生命の、祈りのカタチ。

或いは。

それは誰も立ち入らぬ筈の神域、生無き者のみ滯在を許される死の世界で唯独り輝くよりも。

ふと訪れた来訪者と語り合いたいと。まるで身に付けられるよう

に傍に、隣にいたいと願った結果なのか。

願いを叶える為に人に降りたもの。

人の願いを抱く為に、人になつたもの。

進化と呼ぶか真価と呼ぶか。

退化と呼ぶか対価と呼ぶか。

それをなんと形容すべきか。…………私には、わからない。

わからなかつた。が。

己の知るあらゆる生き物の中で、どんなものより美しいこの少女そのものよりも。

ここに至るまでの道のりを、それを歩むと定めた想いの方を尚。美しいと、思つていた。



人の夢である魔術を統べる私をして、幻と見違えるそんな一幕を、私は特等席で観賞している。

静かに淑やかに、それでいてどこか陽気にはしゃぐ少女を、夜の冷氣に洗われた目で、澄み切つた空氣越しにただ眺めている。

…………ああ、可愛いな。

ふつと、そんな当たり前の様な、でも今まで意識しなかつた感触を胸に抱いた。

惹かれている。

近寄つてみたいと思う。

彼女を■しいと、感じている。
気が散つたまま、望むものを差し出せば生涯を共にすると言つた少女を、今一度真っ直ぐに見つめた。

——私であれば。

今、万能の域に足を浸している己であれば、それもまた叶うだろう。星に満ちる魔力は潤沢。目の仇の科学は落ちぶれ神秘は濃厚。先刻の行使で熱が入った回路は十全。世界に轍わだちとして奥深く刻まれた基盤は独占。

先のサカナと同程度のものを“難題”と称すのに、この身は聊いささか以上に自由すぎる。

…………けれど。

そうして差し出したものは、決して彼女が望んだものではないだろう。

目を、瞑つむる。

あれ程真摯に眺め続けた景色を遮断する。

意識をいくらか手元に残しながら、自分の領域に、夢幻ゆめまぼろしの域に沈んでいく。

夢と分かつて、見る夢だ。

目が醒めながら、見る夢だ。

だつて。

私は。

いつだつて。

ひとの心が、わからぬ

——

回想

理想の成就の舞台裏

千里眼。眼球の形をした魔術礼装。

最高位の魔術師の証。“世界を見通す眼”を持つものにとつて、この人の世は一枚の絵画のように映るという。私の世界に対する意識はそれに近い。世界というパレットに乗せる色を自在に作り出せる私には、下絵の希少さというものが認識できない。色の違いで生じる価値を、価値として理解できない。

唯一の魔術師として成立した時からついぞ、共通の視点の持ち主とは無縁だった。



私が生まれた時、既に西暦は失われていた。

人類は永眠するだけのターンに乗つており、後は突き当たりに衝突するフェイズを待つばかりになつていた。

私の人生が始まる前に、世界はどうに役目を終えていて。

かつて天上有君臨したという神々は遙かな太古に席を失い。

次点で地に満ちた人々は、現代までどうにか永らえてはいるものの、生命としての体裁も失いつつあつた。

人の技術として霸權を握った魔道は、世界の不可思議を暴き尽くす科学に追いやられ。

天より人に授けられた“火”から始まつたその科学すら、失われた情熱に明かりを灯すことは叶わなかつた。

無論、いざれ来る穏やかな破滅を黙つて受け入れようとしていた者ばかりではない。

情熱が枯渇した筈の現代で、未だ熱意を生まれ持つた一部の者たちは、先天的な処置で生活欲を組み込まれた「デザインベビー」として生の強制を試したという記録もある。

そして。それとは異なる一握りの者たちは、別方面からのアプローチを試みていた。

「飛び立つ翼がないのなら、空の方に落ちてきて貰おう」という発想の転換。

未来に向かうことに希望が持てないのなら、失うこと、過去に埋没することへの絶望に追い立てさせればいい。

魔術。只人の手でも行える現象操作術。

曰く、とうの昔に衰退を余儀なくされた技術。

曰く、文明の光に照らされ、神秘性ふしきぎを失つた数多の幻想、その最後の砦。

遠い昔。中世にかつて全盛と呼ばれる時代があり、後はもう尻すぼみな結果しか残らない……と評された、古の体系。

彼らはそれに目を付けた。……いや、ソレも正確ではない。『種の危機を口実に、挽回のチャンスをモノにした』というのが正しいか。

元より、それを扱う魔術師とは、人間である前に“魔術師”という在り方を重視していたらしく、存続に関しての情熱は、一族単位で殆ど安定して維持キープしていたらしい。

…………情熱、というよりかは。

先祖代々の積み重ねを、自分の代で台無しにする責任からの逃避

だつたらしいが。

ただひたすらに後裔に押し付け、その場凌ぎを繰り返していく呪縛を抱え、その呪縛に次代への希望を支えられる種族。

「お前がこれから学ぶことは、その全てが無駄なのだ」――そんなどうしようもない無為を省みず、なおも邁進し続ける求道者たち。

私はその末裔としてかつての都市の住民権を与えられた。
人類復興委員会の前身。それにおいて、復興は大きく蘇生と維持のセクションに分けられる。

維持セクションは技術や命の喪失を。

蘇生セクションは文字通り、失われていたものを取り戻す。それは感受性の話であり、文明の話もある。

失われたと言つても、何も跡形もなく消え失せた訳ではない。伝え聞く形骸を発掘し復元するのが蘇生セクションの主務だつた。

私は蘇生セクションに回された。人類を蘇生する為に発展は必要だ。今歴史が未来に向かっていない以上、過去から採掘する事ほど文明の水準向上に有効な手段はない。

ナーサリーライム
童謡、御伽噺、民間伝承。

サーガ
英雄譚、叙事詩、神話。

魔術、オカルティズムは科学の光が星を覆うまでもつとも強大で、最先端の“文明”だつた。

私はその復古と、存続を任せられた最後の一人だ。

◆

私の生まれた世代は、保持し続けた魔術が遂に畢竟へと至つた世代である。

何せ最初からゴール自体は見えていたのだ。ゴールとは言つても、一步でも他に先んじてテープを切るレース形式ではなく、ひたすら足を止めずただただ走り続ければいいというシャトルラン形式だったが。

元々は“”に繋がる鉱脈の中でも比較的太い流れを保つが故に、遡る経路に採用されていたルートだつたが、それが事ここに至つて現実味を帯びてきた。

魔術とは、使用する者の数に反比例して力を薄めていく。逆に言うのなら、使う者さえ減ればそれだけ極みに近づけるという事。

すなわち。他の全てが脱落すれば。ただ最後に立つてさえいれば。全ての支流は自ずと一本に集約され、至上命題である“”に至れるのだ。

だが至るまでの道のりは過酷を極めた。体感していないが、そうであると私は聞かされている。

苛烈な足切りは常に行われていた。なに、外部から働きかけるまでもない。人類から情熱はどうに失われていたのだ。ぶらさげられる餌も無く、鞭だけで駆け続けられる馬がどれだけいるだろう。

また一つ、さらに一つ……と、時を経ることに夢を諦め潰えていく同志達。^{うきぎりもの}もういい。我が子にこれを続けさせたくない、という人類の弱音の発露だとある魔術師は蔑んだという。

しかし人は共感する機能を持つ。他者の感情は^{でんぱ}伝播する。

次第に感化され、流されるように最後の一線を超え、歯が抜けていくようにな棄権していく。

先祖代々を費やした、^{おびただ}夥しいまでの血道の末路。

無駄に終わる物を正しく無為に仕上げただけの、極々当たり前の無謀の結果。

手を下すまでもなく凋落していく、時代の落伍者同士の競争。

そんな、益体のない意地の張り合いも、いつかは終わる。

残った家もたつた一つ。それ以外は皆、固執するだけの狂氣も、子に無理強いするだけの氣力も失い、歴史の狭間に消えていった。

縛り上げていた呪縛すらも何もかもを燃やし尽くし、遂には推進力が惰性だけになりつつも、まだ止まる事をしなかつた生き残り。

永きに渡る静かで殺伐とした闘争に、遂に終止符を打ち勝ち残った一族。

それが、私の実家だ。かつての第十七衛星都市に居を構えた一族、その末裔。

ともあれ、飽くなき不屈の精神の賜たまものだ。

人類がこの惑星でもつとも栄えた理由の一つを、蘇生セクションのスタッフである私の両親は辛うじて維持していた。

両親は私へ引継ぎが終わつた後、当然のように永眠を選んだ。使う者が三人もいては神秘が分割されてしまう。やるべきことはやつた。為すべきことは為した。

最後に。我が子に全てを独占させる、成果を全て次代に委ねることで真に結びとすると。

希望からも絶望からも解き放たれた両親には、息子は未練どころか体よく事後処理を担当してくれるものでしかなかつただろう。

『人類の神秘を保存するのは後継たるお前の役割だ。
我々は正直、もう面倒になつた』

二人はそう言い残し眠りについた。

そうして私は一人になった。

世界唯一にして最高の魔術師。

実感のないままに並ぶ者無き栄光を掴んだ、燐おだてる者すらいなお山の大将として。

私は彼らのようにはなれなかつた。

“　”に到達したからと言つて、過去の功績をそつくり相続したに過ぎない私にはそもそも目的意識自体がない。

当たりしか残つていらない籤くじを引いただけの私に、それの尊さなんてわからなかつた。

そのたつたひとつしかない当たりを求めて――『たつたひとつ当たりだけ』にする為にどれだけの者が一生をかけて外れを引き続けたかなど。そんな狂氣、斟しん酌しゃくする方が難しい。

否――わからなかつたのはそれだけではない。

そもそもにして、私には『価値』なんてものが理解できなかつた。私は誰とも違うのに。

同じものを見て、どうして同じ風に感じ、同じ値をつけなければいけないのか。

それをどうやつても、理解することができなかつたのだ。

文明の復興の為発掘した一冊。

かつて読んだイソップの寓話。

口バを売りに行く親子の童謡。

連れていた口バにどう乗るかを、無責任な助言に従い台無しにする教訓を授ける道化の話。

どうしようとも難癖をつけてくる部外者の言に振り回され、見当違いな回答を出した末に大損をする笑い話。

全く以て度し難い。意志薄弱に付和雷同カメラもいいところだ。

所詮事の正否や善惡など視点の違いに過ぎない。アドバイスはそのどれもが正論であり、同時に間違つていたのだろう。

足りないのは意見でなく、時にそれを跳ね除け、時にそれを許容するかを決断する意思だつただどうに。

どんなものにも理屈も膏薬こうやくもつくというのなら、きっと価値もどんなものにもつけられる。

そのつけ方は千差万別。判断基準は人それぞれ。

——だつたら。

そんなのを全て、『知ったことじやない』と判断することに、何の躊躇がいる？

……私はそんな寓意を得た。

自分はどこまでも自分でしかない。人は自分以外の当事者にはなれないのだと。

自らの状況に準^{なぞら}え、落とし込み、噛み砕き、血肉とした。

最後の魔術師の系譜として、そうする義務^{しあく}があると押し付けてきた一対の生き物を覚えている。

魔道の最奥へ、辿り着く権利^{せきにん}があると無理強いされた。

私達の子なのだから、それが背負うべき使命だと。胸を張つて誇るべき運命だと。

そう言われつつ魔術を受け継ぎ極める過程で、私に達成感の様なものは欠片もなかつた。

むしろ全てが空虚だつた。言われた事をただ成し遂げ、ひたすらに自己記録^{レコード}を更新していく日々。

ネジを巻いただけで動く、ブリキの人形。当時の自分を例えるならそんな在り方だつただろう。

向けられた方向に進みはすれど、中身は詰め込むものもなく空っぽで。

内の重みに足を鈍らせる事もなく、そのくせ外側^{みそくわ}だけが頑強で。もはや本体とすら呼べる、その装甲すらも薄つペラだ。

考えてみれば当たり前だ。守るべき財宝^{モノ}も中にはないのに、防備を厳重にする理由^{ひつよう}がどこにある。

そんな空洞に抱いたのは、成し遂げた感動とは違うモノ。

『——自分がまだ試したことのないことを、どうしてこの人たち
は出来るなんて期待するのだろう。ヘンなの』

……内に響いたのは、たったそれだけ。

だつてそうだ。意味が分からぬ。私の事を自分以上に知つてい
るなんて理不尽だ。矛盾している。

私ができるかどうかわからない事を『出来る』だなんて——そ
れをどうやって、信じればいいんだ。

知つたような口をきくな。身勝手な推測で私を語るな。一体私の
何を知つていてるつもりでいる。

今こうしてお前達のせいで悩んでいることすら、何一つ知らないく
せに——！

空虚ながらんどうに熱が灯る。

それは奮起する情熱ではなく、焼け付くような苛立ちの炎。

……そんなやるせなさをどうにか抑えくすぶらせながら、私は常に
抱き続けていた。

そして抱えただけだつた。吐き出しひしなかつた。一度たりとも。
こんな価値観に凝り固まつた両親にどれだけ言葉を尽くしても無
駄だというのは、十分に知れていたことだつた。

言葉とはつまるところ、相互理解の架け橋だ。

基盤になつてゐる互いのルールを尊重し合う事により、距離を跳躍
し縮める事が可能となる。
だが忘れてはならない。

言葉とは『分かり合う』為ではなく、あくまで『話し合う』為のツー
ルに過ぎない。

相手をどれだけ尊重していようと、気に入らないものは気に入らな
いのだ。

理解できないものは理解できないし、したくないものは受け流すな

り否定するなりするしかない。

痘痕も笑窪と言えるのは、それが許容できる範囲だからだ。

相手を慮り、納得してもらおうと言葉を尽くす事があつても、そう

なのだ。

それすら満足にされなかつたのなら、どうすればいいのかわからな
い。

望んで生を受けたんじやない。

生まれたいと祈つて生まれた訳じやない。

勝手に産み落としたくせに、勝手に生きる事は認めないなんて冗談
じやない。

堪らない程に業腹だつた。

口クに意見の共有を図りもせず、『これが最善だ』と強要されるのが
忌々しかつた。

そんな相手でも、一方的な押し付けしかしてこない間柄でも、親は
親だ。

だが――

だから。私は。

せめてもの手向けど、両親を看取つた後。

それを最後に。自分以外の全ての意見を、跳ね除ける意思にした。

全ての景色を一色にできる私にとつて。

全ての色を、塗り潰してしまえる私にとつて。

――あらゆる色を配合し、再現できてしまふ私にとつて。

世界はもつと、複雑であつてほしかつた。

冷めた現実、醒めた夢

都市で触れられる情報の海からのサルベージは、もう全て済んでしまっていた。ここでもう学ぶものはない。得られる意味はない。なので、都市の外から更なる文化の回収を目論んだ。それは事実であり口実もある。

もう果たすべき役割が失せてまで、外にまで求めた理由は単純。

私はどうしようもなく、物語が好きだったのだ。

だつて物語は人とは違う。決定的な差異がある。——彼らはこちらに語りかけはしても、踏み込んでは来ないのだ。

自意識を持ち交流を能動的に^{アクティブ}図つてくる人間と異なり、本は手に取られるのを待つだけの受動的なもの。

いつかの先で知る月の裏側の物語の様に。

——『人と人でないものが共にあろうとするのは難しい』という異なるものとの教訓とどるか。

——『完全故に届かないものを求め、それを失つた愚かさ』という身に余る渴望の末路とどるか。

——『恋い焦がれた一人の為に、自分の全てを懸けられる愛の強さ』という恋の物語とどるか。

本の解釈とは、その持つ意味合いは、全て読み手に委ねられる。書かれた本意を主觀で決めつけたってかまわない。

たとえどんな横暴な結論を出そうとも、それに反論をしてこない。ぶつからない意見交換。異なる解釈を自儘に許し、咎める権利もないもの。

分かり合う必要性のない、価値観の集合。自分を侵略する恐れのないもの。

自分が脅かされることを、危惧しなくていい他者。
まったくなんて素晴らしい——咎なく貪れる知識の果実。

奪われる心配のない変化の材料。悲劇を共感する懸念のいらない愛情の矛先。

それは私の望みに合っていた。だからそれをひたすら追い求めた。

礼装を組み上げ、術式を用意し、外界でも十全に神秘を行使できるよう_{バックアップ}工房を整えた。

復興を掲げながらも、病的なまでに他人に無関心な都市の人々は、私の作業に注意を払わなかつた。役割さえこなしていれば、誰も私生活には干渉しないのだ。

術式を編み込んだロープを纏い、私は故郷を発つた。

ここではないどこかを巡る日々。

尤も、あてどない旅では日論み通りに事が進むはずもない。なんせこんなご時世だ。赴いた先に文化が伝承されず残つていなかつたり、教えてくれるだけの熱意も無かつたりと空振りに終わる事も多かつたが。

充実、していたと想う。

少なくとも、食べ残しすらない皿を眺め続けるよりかは。

空を飛んでの逍遙_{しょうよう}を続けるその過程で、ふとかつて暮らしていた世界を見下ろす事になつた。

胸に飛來したものは強烈な罪の所在だ。

「私は物語が好きでも、魔術師が嫌いだつた訳ではない。

ただ――彼らの期待を、無碍にしたくなかっただけだ」

故郷を去る事を決めた契機を思い出す。

両親が眠り、それを以て”　”に到達したあの日。

全てが決定的に変わり、もう何もかもが行きつく処まで行き詰つた夢の端っこ。

「私にはできる」と、よくわからない根拠で期待した父母と。自信もないまま、見込み通りにそれを叶えてしまった自分を。

その内心。

ただ向けられた念願を。まるで私の人格を考慮していない要望を。本当は怒号を吐き捨て、激昂と共に叩きつけてやりたかった。実感の伴わない期待を、踏み躊躇にじりたくて仕方がなかった。

だつて。そうすれば、二人は。

未だ、私の隣にいてくれたのに。

役目を終えれば、後は死を選ぶだけと分かっていたのに。

両親を止められる言葉を、私は持たなかつた。

だつて。受け入れて貰えない事くらいは、分かつていた。

彼らの願いは、彼らが絶対に見られないものだから。

彼らが生きている限り、彼らの夢は成就しないのだから。

生命は変動を原則とする。

子を為した時点で親は本来お役御免なのだ。

いつそ死を選ぼうが、それは個人の自由だつた。

それを引き継ぐ為に、本当はもうずっと止めてしまったかった筈なのに。

無理を押して育んでくれたのだから、それ以上の我儘は言えなかつた。せめて安らかに、介錯する様未練を断ち切る事しかできないなんて。

ずっと前から分かつていた。

たとえ自分の人格ことを見ていくなくても。

見ていたのが『自分達によつて作られる、魔術師としての集大成』

だつたとしても。

そんなひどでなしでしかなくとも。
こんな自分を育てくれた、大事な家族だつたのに。

ロバを売りに行く親子の童謡を思い出す。

助言してくれた人達だつて、決して嘲笑い、論う^{あげつら}為に否定したのではなく。

たとえ的外れに見えたとしても、それは狙つてているのが違つただけ。ただ単に、見据えているものの違いだ。

彼らにとつて一番大事なのが“魔術師としての在り方”で。
私にとつて一番大事なのが“家族”だつたというだけ。

それを知つていた。

知つていて、見ない振りをしていた。

嫌われることを恐れ、自分を主張せず、ただ飲み込み続けた。

…………わかつてもらうために言葉を尽くさなかつたのは――
――私の方だつた。

魔術師^{ふたり}の望みは、人間^{わたし}さえ諦めれば、こんなにも簡単なことだつた。

それでも。

もし想いを汲むのなら別人になる。

それまで恐れていたものと同じになる。

それは自分を殺す儀式だ。

魔術師とはつまり、祖先の想いを守る為に、真つ先に人間^{じぶん}を殺す存在なのだ。

それを嘆かない日はなかつた。“人間”でしかない頃は、夢と現実の境界が覚束なくなつていくのが堪らない程恐ろしかつた。

眠る前は二度と覚めないのでと怯えながら、起きた時には実は夢ではないかと震えながら、一日の終わりと始めを繰り返した。

でも。

——人のかたちをしたままでは、人でないものの願いは叶えられない。

それを、知っていた。

だから……

彼は愛された、愛されるに足る自分でいる為に。

愛し続けて欲しいと願った、自分が愛したものに別れを告げた。

だから、これはどこまでも当たり前の話だ。

相手を理解しようとしなかつた生き物同士が、互いの真意を知ることなく。

なあなあでその場しのぎを繰り返すうちに、さざめく時に押し流されて、つながりを断たれたというだけの。

…………その響きを聞く者はいない。
胸中の独白に応える声はない。

顔を覆う両の手は、凍える心を包むに程遠い。

今や同類などただのひとりもない。

震える肩は、灯りの遠い空気によつてか。それとも、隣り合う誰かのいない寒さによつてか。

呟いた悲哀の歌は力タチもなく。風は言葉をかき消すばかりで。

心の揺れは振動として大気に伝わり、解けたまま空に溶けた。

押し潰した慟哭は零になつて海に紛れる。

無数の光が並ぶ、いつまでも眺めていられる星空も、温もりを分けてはくれない。

空も海も夜も、あらゆる嘆きを受け止めてくれるだけで、何かを返すことはない。

あれだけ追い求めた本達と同じだ。こちらの嘆きを否定はしない。
見向きもしない。

ただ、受け入れる。

その手応えのない大らかさが今、何より寂しさを助長した。

私は父を死に追いやり母を死なせた。
だから世界と、人間を見捨てただけ。

何もかもが億劫になつて、相互理解の繋がりを、精神的に断つたのだ。

終極

心に名前をつけるなら

——そんな、幼い夢を見た。

…………瞼を開けた途端、飛び込んできた星空と海の明かりに目を細める。

何も必要なくなる所為で、誰にも必要と叫べなくなるまでの過程。細くて重くて冷たい、でも失いたくないと本気で思える繫がりが、まだ確かにあつた時。

…………そんな悲しいだけの関係が、自分の一番で。

でも、何もない今よりかはまだ、幾分かの救いがあつたと。胸を張つて断言できた頃のお話だつた。

そんな気分のまま暫し佇み、ゆつたりと気持ちの整理をつけた。

…………そろそろ潮だらう。

居心地のいい悪いがない交ぜになつた耽溺とうひから氣を取り直して、今一度彼女に声を掛ける。

「お気に召して頂けたかな？」

月のサカナをひたすら愛でていた少女は、その言葉にはつとなつて見返してくる。

その様子から、今の今まで一心不乱だったらしい事が伺えて。微笑ましい姿に思わず破顔する。

彼女が心底から望んだものではないとはい、そこまで気に入つてもらえば御の字だろう。

「その様子を見るに、満足いく一品みたいだね。良かつた」

「え、ええ」

つい頬が緩むのを抑えられない。

自分が手懸けたもので満足してくれたことは勿論、それ以上に、彼女のわたわたとした姿を見られたのが渝しくて仕方がない。

…………本当、目の前の彼女にはいろいろなものを貰つてばかりだ。

本も知識も、それ以外のものも。

魔道の頂点。人類最後の異能を受け継ぐという、呪わしい名譽を冠する一族――なんて立場を、ずっとずっと忌々しいと思つていたが。

この血に宿る無益な修練もえげつなさも。

そこに至るまでの本人では掴みとれない栄光を求める執念も。

そんなつまらないものの結晶おかげで、こんな素敵な女の子の姿を見られたのなら。

積み重ねられた無為無謀も、最悪よりかは、ほんの少しだけマンだつたのかもしれない。



そんな風に和まされつつも、時間はとめどなく過ぎていく。
それは一種残酷な程に慈悲深い。

どんな深い感動も風化させ、どんな深い失意も慰撫する。
少なくとも今の私には残酷だ。見納めだろうこの景色を、せめて満足いくまでは眺めていたかつたのに。

「えつと……言つたとおりの『月のサカナ』、確かに用意できた

んだし。

「どうか、その…………わたしと結婚、したい…………の？」

自分の中で一段落がついたのだろう。何とか冷静になつたらしい
彼女。

それでも恐る恐るというか、探り探りというか。

そんな彼女らしくないおどおどとした様子で、ちらちらと上目遣い
にこちらを伺う。

難題を踏破した暁には、一生をかけて報いる誓い。

そして今、このまま彼女に明け渡せば、私は見事それを果たした
……と言えるだろう。

「いや？ 君と結婚はしないよ」

という訳で。

軽く手を振りながら。そんな風に苦笑しつつ、否定の意を示した。
断られるとは思いもしていなかつたのか、ぱちくりと目を瞬かせる
彼女。

その様がおかしくて、つい表情を緩めてしまう。

…………それが面白くなかったのか、先程までの機嫌ぶりを返上
して睨みつけてくる。

ただその発端は、袖にされたことを怒つていていうより、
どうして無下にされたのか分からぬことに憤つていて。そんな
感じだ。

予想外だというのも想像はつく。

なんというか、こちらを不機嫌に見返すその顔すら可愛いと思う時
点で、もう本当にどうしようもない。

私は確かに難題を解いた。少なくとも、見た目だけならば。
だがそれは本意に沿っていない。それを彼女は理解していない。
そう在るコトでもないだろうし、とういそくみょう当意即妙とはいかないか。

両手を上げて降参の意思表示。

納得させる為に、自分の性能を極々単純に要約して伝える。

「ごめん。少し見栄を張つた。

端的に言うとだね。

諸事情在つて、私はほぼ全能に近い万能性を有している。
少なくとも、君の難題を『難題』とも思わない位には」
だから、私はそもそも君の条件を満たしていないんだ。

きよとんとする彼女。その返答がいまいち腑に落ちないのか、疑問符を浮かべているのがありありと見て取れる。

流石に省き過ぎたらしいので、言葉の数を増やしてもう少しだけ補足した。

「だから――万能だと言つただろう？ 今見せたように。

それが“月のサカナ”であろうが何だろうが、私は大抵の物は創造できる。

つまり私には価値が分からぬといふ事なんだ。

どんなものでも十把一絡げに作り出せるのだから、そも“価値観”という概念 자체が成立しない」

「…………？」 価値が分からぬ人が作つたものには価値がないの

？」

「いや、価値はあると思うよ。だがこの場合は駄目だろう。

価値はあつても、そのもの価値自身を君が求めていないことが問題だ。

私はこのサカナにも手に入れた過程にも、何の思い入れもないのだ

から」

「?? やっぱりよくわからぬわ。どういうこと？」

未だピンと来ていなさそうなので、喻えを交えて解説してみることにする。

彼女の難題は、愛と価値を同一視しているが故の物だ。

彼女は愛をそれ以上の価値で証明しようとした。

そもそも釣り合わないことが前提の天秤。向こうに重い分銅を載せた上で、軽い受け皿の側に秤が傾くのを待つている。

そんなのは矛盾だ。

矛盾が解けないのは問いかが難しいからではなく、問い合わせてきた解答の整合性がとれないから矛盾なのだ。

そして、矛盾を解き明かしたいのなら、背理で解決するのが手つ取り早い。

矛盾の非整合性そのものを暴き突きつけ、問題そのものを解体すればいい。

愛と価値は無論別物。一体化するほど絡まつた認識を解して、別々の糸に選り分ければ、それで済む。



仏教における説話の一つ。

ある日、死んだ子を背負った女が釈迦を訪ね、こう口にした。

「我が子は身動きが取れないほどに重い病を患っています。あなたが真に己を仏と仰るのなら、どうかその御業を以て、愛しき我が子を癒してください」

しかし悲しいかな、子供はどうに息絶え朽ちて、背負われたその体躯は腐敗を始めている。

女は死んだという事実が認められずに、まだ救いのある病という事にして、自分自身を欺いていたのだ。

それに対し釈迦は、こう告げたという。

「宣しい。真に君が我が子を慰めたいと思うのなら。

一度も死者を出したことがない家から、芥子の実を貰つてくるがいい。

そうすれば、君の子を救つてあげよう——

その言に女は狂喜し、方々の家を訪ね回った。我が子を救う道を得たと。後はそれを駆け抜けるだけでいいと。

どこかにたつた一つでも、誰も亡くなつたことのない家を求め、無数の居住を訪問した。

しかし、誰一人として「いない」と答えたものは居なかつた。

どの家でも死んだ人がいた。誰かしらを残してあの世に去つていた。

残された彼らは寂しそうな顔をしながら、それでも日々を生きていた。

そんな彼らを見るうちに、母親は愕然となつてている自分が内にいるのに気が付いた。

誰もが大切な誰かの死を悼み、それでも、それを乗り越えて今日を生きているのだと。

母親は知っていた。本当は、我が子がもう亡くなっていることを。知つていて、見ない振りをしていた。狂つた格好を演じていただけだつた。

だつて、そうすればいつまでも悲劇に浸つていられるから。

自分に同情してあげていられるから。自分を慰めていられるから。

「我が子を亡くした哀れな母親」という偶像に酔つていられたから。蒙もうが啓ひらけたその母親は、釈迦の元に再度訪れ、生涯を懸け帰依する

ことを誓つたという――

その姿に、釈迦はこう言葉を掛けた。

「ああ。どうやら、病気は治つたようだね」



…………などと、一連の説話を滔々と告げた。

原典からかなり端折つてはいるが、要点は押さえてある。
必要なエッセンスは何一つ取り零していない。理解に問題はない
筈だ。

一拍置き、汲み取れる教訓を現状に落とし込んで話してみる。

「これに準^{なぞら}えて君の難題を解いてみようか。

この場合釈迦の提示したもので重要なのは芥子の実ではなく『死んだ者がいない家』だろう？ 芥子の実自体は舞台装置^{マクガフイン}の一種に過ぎない。それが別に塩でも椀でもなんだつて構わなかつた。

この話の神髄は、『誰もが悲劇に見舞われ悲痛に暮れることがあれど、それでも区切りをつけ、当然のように日々を送つてている』という教訓の方にある筈だ。それと同じ。

君が欲しいのは無理難題にまで昇華される、前人未踏でかけがえのない価値あるもの――ではない。

その価値が顯す愛の筈だ。価値あるもの自体は本来どうだつていゝ。別に無くたつて構わない。愛さえあれば。

私は愛は分かるが価値が分からぬ。

そんな生き物が価値あるものを差し出したところで、愛の証明には

ならないだろう」

過程も成果も、それぞれが独立した人間の意志だ。だからこそ、さいご結末だけあつていればいいなんて格好がつかない。みつともないにも程テキストがある。

途中式は重要だ。テスト試験は理解度を試す為のもので、破れかぶれで答えを埋める為のものではないのだ。

たとえ合格に届かずとも、そこに至るまでの試行錯誤は評価に値すべきもの。過程が欠落した解答など空欄にも劣る。規則違反を疑われ、非難されるのも止む無しだろう。

「今その気になれば、私は君の望むものを差し出せるだろう。躊躇なく未練なく逡巡なく。

だが、それは君を愛しているからではない。愛情によるものではない。

ただ単に、私は価値に価値を見いだせないだけなんだ」

つまりは、それが万能でしかない——完全に届かない私の最後の欠落だった。

私は万物を創造できるが故に、どうやつても被造物に『かけがえのない』という価値を付加することができない。

そしてそれが唯一無二の価値を持たない以上、他者にとつてどれだけの逸品だろうが等価値であり無価値だ。全ては幾らでも代用可能、取り返しのつくものでしかないのだから。

どんな代物であろうと組み上げられるなら、それを計る明白な基準は喪失する。確固たる一でない限り、無と無限はどうしようもなくイコールで差し引きはゼロだ。

そこまで説明すると流石に理解が追いついたのだろう。

先程の險が取れた表情で、それでも食い下がつてきた。

「それでも、わたしは構わないわよ？」

わたしの提示したもの用意できた人に一生を捧げるのが、わたしの約束だし」

「そう言うと思つた」

君なら間違いない、なんの気負いも躊躇いもなく。その濁り無き双眸で、そう口にすると信じていた。

そんな君にこそ、応えて欲しいと思う。

そんな君だから――応えて欲しくないと思う。

「ごめん。君は約束を守つてくれるんだろうけれど――守りたいんだろうけれど。

私の方が、約束を望めない。

私、ね。一度、共感しないままひとの願いを叶えたことがあるんだ。

私の両親。

「もう、やめたい」 つていう願い。

私を完成させたら、もう自分たちは用済みで楽になれるから。こんな時代だから、仕方ないと言えば仕方ないなんだけれど。

……でも、それは失敗だった。

私、両親のことは大好きだったんだけど、その願いは本当は嫌だつた。

でもそれを拒んで嫌われるのが怖くて、結局一度も口答えしないまま叶えてしまった

初めて掛けられた願いを遂げた時に、知った事だ。

共感のないまま願いを叶えるのは、自分の知る中で一番辛い事だった。

期待に応えられない事より。

力及ばず膝を屈する事より。

……応えた果てに、自分一人が残される事より。

歩んだ道に殉じて培つた末に出した結論を、何一つ味わっていない

自分が知ったような口を利くのは許せない。

彼らがそこまで必死になる理由をどうしても、自分のものにはできなかつた。……していい理由を、見つけられなかつた。

その人の幸福はその人の悲劇は、それを選んだ決意は、私のものではないのだから。

出した結果は十全だつた。

理想に現実で応え続けた。

期待に成果で報い続けた。

願望を努力で叶え続けた。

でも、過程に心が伴つていない。

自信がなく、根拠がない。

困難に猛る魂がない。自分がそれに相応しいという自負がない。

何としてもやつてのけようという気概がない。

私はどうしようもなくハリボテだつた。貰い物で義理を済ますだけだつた。

まさしくブリキの人形だ。

中身がなくとも外身は動く。電気の刺激に反応する、仕掛けの様なもの。

構成するのが肉か無機物ゼンマイかの違いだけ。

それは心を伴わない、入力した通りに動く、只の機械だ。

…………それを。空っぽでしかないと思つた胸に、何より痛いと感じたのだ。

応えられる根拠の見えない希望は重くて。
力及ばず取り零してしまうのが恐ろしくて。
見てくれしか用意できない有様が情けなくて。
それは、辛かつた。

本当に本当に——言葉にできないくらいに、辛かつたのだ。

自分は間違っていると思つてゐるのに、誰も咎めてはくれないのだ。

罪ですらない業がどれだけ償いようがないかなど。泣き叫びたくなるほど知つてゐる。

だから…………今日はそうしない。

教訓を得たのなら、それに殉じなければ。

過ちを犯したのなら、それを繰り返さない様にしなくては。

損失を生み出したのなら、それを埋め合わせなければ。

少なくとも、更なる損失を避けるために活用しなければ。

叶うのなら、それ以上の利得を生み出す土壤にしなくては。

自己改革は生命の義務だ。

失態を晒したのなら、二度と同じ経験^{きず}を負わない様、自分を戒めなくてはならない。

それが自分の願いを軸に成長する道ではなく、環境^{ひき}に合わせて成長する道を選んだ者が得た、愚かな教訓だ。

「君のことは好きだけれど、君の願いは好きではない。

その願いは私に相応しくない。叶えたく、ない」

愛とは共感の一種だ。全く異なる筈の他者と同化し、意識的な産物である幸福を増やそうという機能。

献身を旨として総量を誤魔化す、物質の充足と精神の充実を引き換えにする等価交換。

だから。

もし誰かの感情^{こうぶく}を、自分のものにできないのなら。我が事の様に、思えないのなら。

自分の気持ちを決めつけられるのも、他人の気持ちを決めつけるのも、我慢できないのなら。

どれだけ他人を想う事があつたとしても。

この世で、きっと私だけは。

「だから私は――君を愛してはいない」

この世できつと私だけは――それを愛と呼んでは、いけないのだ。

◆◆◆

自慢じやないけど、わたしは殿方に言い寄られた事なんて何度もある。

それは、人類復興の使命を果たそうとする為だつたのかかもしれないし、

わたしの優れているらしい容姿目当てだつたのかもしれないし、この光り輝く海の珊瑚の威容を求めてだつたのかもしれない。

求婚だつて十六回もされた。そしてその全てを断り続けた。

誰にも解けない様な難題を考えて、それを解くことを受け入れる条件にした。

どんな困難も無茶無謀も無理難題も、愛さえあれば覆せるのだと信じて。

思えば——わたしは期待してたんだろう。

この星から失われたという、人が生きていく上で、いちばん強くてきれいな理由。

それを証明してくれるのなら、この一生を捧げるのに値すると。無意識に高望みしていた。

だから、本当に初めてだつた。

提示した難題の品を用意してくれた人は。

そして、初めてだつた。

「わたしを愛していない」なんて言う人は。

「そう、なの？」

「ああ。私は君を、愛していないのだから——
だからこの話は、これでおしまい」

「…………そつか」

彼の返答はたしかに予想外だつたけど、それで取り乱すなんてことはない。

むしろ納得した位だつた。

難題を達成した暁には、全てを捧げると決めていた。

だつて、その人はそこまで必死になつて私を求めてくれたのだと

思つたから。

だから今日の前にいる、こともなげにソレを成し遂げた人は見合わない。

彼が作つてくれたものは、決してわたしが望んだものじやないんだと。

わたしは本当に、自分に相応しくないのだと。

ただ一つ引っかかる。納得はしたけど、納得したかつた訳じやないこと。

どこかもやつとした何かが渦巻いている。それが妙に気に障るのだ。

そんな内心を知つてか知らずか、彼は茶化すみたいに表情を崩して。

「もし先程のが、君からの求婚だつたのなら御愁傷様。

私は今、君をふつてしまつた――――――――――――――――――――――

ふられたのは、初体験だつたかな?

いや、"君達"には、二度目になるのか

そう悪戯っぽく微笑んだ。

……………その笑顔が、少しだけ悔しい。

知らず奔^{はし}つた、胸の奥底に凍り付くみたいな焼けた痛みと、冷たい後ろめたさに顔を歪める。

「えつと、ごめんなさい」

「どうして、謝るのかな」

「だつて…………わたし、嘘ついちゃつたし。

もし難題を叶えられたら、一生を捧げるつて誓つたのに」

今の言いぐさが、わたしに責任を感じさせない為だつてことくらい分かつてる。

それが、少し哀しくて、悔しい。

そこまで気を遣わせたのが。そうせざるを得ないくらいの格好悪さが。

みつともなくて、やるせない。ふがいないし、なきれない。

「それは違う。君は約束を守ってくれた。

もともと求婚の為に来た訳でもなければ、その為に作つたわけでもないからね。

ここに来た時、そう告げていただろう？

私はもうこの島には来ないけれど。

でも、君の本を読む。この本、本当にお気に入りだから。……本当に素敵だつた。何もかもが。

きっと何度も読み返すことになると思う。この素敵なお話。

君がその手で記してくれたことも。

記している間に交わした会話も。

そうしてくれた君の思いも。

憶えている。憶えておくから」

呼吸いきを呑む。

「だから君はもう何もくれなくていいんだよ。何を責任に思う事もない。

私が最初に願つたものを、君はちゃんと用意してくれたんだ」

だから。
もう。

それ以上は望まないと。

その瞳が言つている。

言葉にしなくても伝わっている。

その言葉を呼び水に、遠い昔の記憶が甦る。

自分の聞いたことがない、でも知っている記憶が駆け巡る。

あの空に輝く死の世界が死の世界に戻る直前。

かつて誰もいなかつた星が、もう一度誰もいなくなる間際。

“落ち着いて。君に、私はもう必要ない。その心は人恋しいだけなのです。

ですから、あの星に落ちなさい。あそこには君の望む全てがある”

“人間がイヤで、何もかもを見限つて、月に昇ってきたのです。
そんな私が、人を■する訳にはいきません”

——そんな。

そんな言葉を、むかし。耳にしたことが、あつて。

それが■とは呼べなくとも。■ではなくとも。
お互いを想い合っていた筈なのに。
お互いを、想い合っていたのなら。

それでも、とは思わなかつたのか。

それでも——.....

わたしは何分もかけて、目の前にいる鳥を捕まえるような、蝶を掴むような動作で、手を持ち上げかけていたのを、押し止めた。

ああ―――わかつちゃつた。

たとえわたしを愛してなくとも。

彼が、難題しか解けない人であつても。

どれだけわたしに相応しくなくても、わたしは。

彼のことを、思いの外氣に入つていたらしい……なんて。

そんな今更過ぎることを、全部が手遅れになつてから、ようやく気付いたみたいだつた。



何かを吹つ切つたような、澄んだ表情。晴れた、とは少し違う。正しくこの夜空の様な、突き抜けるようで、でも日の光の暖かみとはまるで違う何かで満ちた面持ち。

それは硬く無骨な金属の冷たさではなく、気持ちの良い、さっぱりとした水の清涼さを思わせる。

長きに渡つた念願が潰えて尚こんな表情ができるのなら。
本当にもう、私は必要ないのだろう。

それもずっと前から気付いていて。

でも私には、なんでもできる私だからこそ、どうにもできない事だつた。

―――人には、人でないものの願いは叶えられない。

そして私の両親は、人ではなかつた。
だから私は人を辞めた。そうならなければ、叶えられなかつたか
ら。

それ自体が両親の願いだつた。

魔術師として完成する。それこそが存在理由。

そして人になつた月の願いは、

もう人でなくなつた魔術師には叶えられない。

『月は何の得があつて 満ち欠けを繰り返し 彼に何の得があつて その腹に兎を飼つているのだろう
夜光何徳 死則又育 厥利維何 而顧菟在腹』

それが「月が兎に惚れたから」なら。我が身を捧げ尽くすのが、月の愛になるのだろう。

でも、もし兎が月に惚れたのなら。愛の証明に何を差し出せるのか、なんて知らない。

その身を食ませる訳にもいかない。肉体はどうに帝釈天に捧げた後だ。

兎は人外への献身の報酬として、輝く月に招かれたのだから。

…………これはたつたそれだけの話。

もう人間の心も、他人の心もわからなくなつたきものが。

今更ひとをどうこうする資格もないと、それだけの話だつた。



魔術を行使し、ふわりと宙に浮きあがる。

ここを飛び立ち、後にする準備を整えた。

「それでは。そろそろ幕引きにちようどいい頃合いだらう。名残惜しくはあるけれど、これで、御開^{おひら}きにしようか。何かと世話になつたね。ありがとう」

「いらっしゃ。いろいろ楽しかつたわ」

互いに別れの口上を述べる。はつきり言つて遅すぎだ。

さよならの挨拶なんて、随分と前に済ませておくべきだつただろう。私の用件はとつくに済んでいたのだから。

「…………それで貴方、もう本当にこの島にはやつてこないの？」

「すべきことはもう終えたからね。それがいいだらう」

「そう。…………次はもつとうまくやるわ」

「次？」

「ええ。詳しくは秘密だけど」

「…………、…………ああ、求婚についてか。実際、私相手には失敗したしね」

次は万人の愛の証明になるよう、難題の詳細を練り直しでもするのだろう。

詰めが甘い所は確かにあつた。…………いや、私のようなケースは本当に例外だらうが。

「そんなところ、かも。でも全部は教えない。

今のはわたしには、ちゃんとした言葉にできないから」

「そうか。今度は上手くいきそう？」

「うん。次はきつと。

ありがとう。貴方のおかげで、おばあちゃんの願いは叶つたみたい

い

「良かった。その思い出を肴^{さかな}に、君の本を読むとしよう

その口ぶりから察するに、今の段になつて何か企んでいるらしい。

どうにも一癖ありそうな予感。

ただ――私には関係のない事だろう。
もう二度と、彼女に会う機会がない私には。

そう思うと、じくりと刺すような痛みが胸中に広がった。
惜しいと思う。今何もかも形振り構わず彼女の手を掴めたなら、ど
んなに幸福かと思う。

でもしない。今、どれだけ■おしく感じようと。

肉親を見捨てた時点で、その権利は己が手で焼き捨てた。それを、
たが違たがえない。

遙かな誓い。誰も愛さないと決めた。共感しないと決めた。
もともと私の人類愛は故障している。

だからこそ、こんな世界にやつてきた。

だからこそ、こうやつて得られる筈の時にしか、心の所在に気付か
なかつた。

罰のように思い出す。私は昔、そういう人間だつたのだと。

ここから先はロスタイルム。

既に規定時間は過ぎており、続く言葉はもれなく蛇足。語る言葉は
残らず余録。

…………それでも、もう少し。

伝えて
おかないと。

「それでは最後に。

いつか

君を愛し、君の難題をその愛を以て証明する。そんな弱くて誠実な人がいつかきっと現れる。

だから、この島で待てばいい。ここには君の望む全てが揃う。
願わくば。誰も愛せない私とは違う、素敵な人と一緒になれるよ
う、祈つている」

多くの人々と違い、強く、身勝手になれなかつた人でなし。
そんな機械に、他人を思ひやる機能はないとしても。

のね？

貴方の方は

仮令この想いを愛とは呼べずとも、私は、彼女が好きなのだ。

そし想へかことは正しくはなくとも嘗てはない

……………そういうつづ障害物を取り除くだけで実際のコールインを他人任せにするのは、正直かなり格好つかないが。

くすくすと笑い声が耳に届く。

それが堪えられないくらいおかしかったのか、彼女は眼の端に涙すら浮かべながら微笑んでいた。

「…………あなた、本当に変な人」

「そうだね」

私は、そんな生き物だから。

「だからこそ――君みたいな女に恋をした」

愛とは違う。想う事で幸福になれるかどうかなど考えずに。
貴方には光あれと、身勝手にも願つたのだ。

目貫く星と海。

髪を靡かせながら、暗い宙に落ちていく。

島を去つていく。

君を去つていく。

私は今、かつてないほど人間的だ。

そうか。失恋を知る為に、私は星の裏へ渡つたらしい。

それを愛と呼べずとも

誰もが逃げだす無理難題。

その困難を空想ではなく現実として描き出せる彼は、それを一部も違えず成し遂げたにも拘わらず、わたしの手を取らずに去つていつた。

燐光を撒きながら飛び去つた、最後の幻想。

二度と、彼がこの島を訪れる事はない。
わたしに会いに来ることはない。

一連を鑑みるに…………うん。

どうやらわたしは、本当にふられたらしい。

いきなり不意打ち気味に求婚の品を出してきた件については許してあげようと思つたのに。

よりもよつて解いた上で、まさかあつちの方から断りを入れてくるなんて考えもしなかつた。

「そのくせ、『月のサカナ』はおいていつたし。もう」

仕方ないんだから、と一人呴きながら遠い満月を見上げる。

見守つてくれる遙かな故郷を仰ぎつつ、遠ざかつていつた背中をつい偲んだ。

…………彼の言つた通り、望みは確かに叶わなかつたけど。

でも、とても素敵な出会いだつたと思う。

望みがただ叶うだけよりも――きつと。

愛されこそしなかつたけど、恋は、「誰かを想いやる」という感情は理解できた。それはもう、十分すぎるほど。

求められたものを用意する能力がないからではなく。

折角手を尽くしようやく手中に収めた、手元の宝が惜しいからでもなく。

わたしを欲すが故に。

わたしを思いやるが故に。

手が届く筈なのに。

手を伸ばせば、それを掴み取れる筈なのに。

「君の待ち人は自分ではない」と。

わたしに伸ばす手を押し止めた、想いを握り潰す様な逡^{とど}巡^{しゆんじゅん}を見た。

慈愛と焦燥がない交ぜになつた、わたしでは持ちえぬ切望で満ちた瞳を覚えている。

前人未到の無理難題が正しいカタチで遂に叶つたとしても、決して自分で浮かべることがないだろう——握られもしていない手が溶けてしまいそうなほどの、熱。

わたしは愛を知らなかつた。知識では知つたけど実感があるかは今でも怪しい。

システム
系のように相互補助の安定がある訳でもない。

安心も打算も組み込まれた、明確な作業として現実に現出させられる訳でもない。

別にそれでいい。なにもおかしくない。

『実在はしても実体はない』。

單にそれはもともと、そういうモノなのだという。言われてみれば単純な話だつた。

情熱がないと思つていた自分には理解できない…………なんてこともなかつた。

それが凄く誇らしくて、同時にちょっとだけ残念。

あの時こちらから掛けられる、相応しい愛の言葉を一つでも知つていれば――わたしに惹かれるが故に伸ばされ、わたしを想うが故に引かれるその手を。

わたしの方から、繋ぐこともできたかもしれないのに。

あんなタイミングで気の利いた言葉のひとつも出でこないとは、読み書きを進んで学ぼうとしなかつた報いがこんなところで回つてくるなんて。

遠い昔のかつての人は、青春の大半を将来使うかどうかもわからぬ勉学に費やしたと聞くけど。少し前の執筆しかり、今の己を省みるに、学ぶところは案外に多かつたらしい。こんなところで崇つて躊躇する羽目になるとは思いもよらなかつた。

活かせなかつた教訓に口惜しむ。

いまの人類にとつては一期一会がスタンダード。

はじめて月の時とは違つてわたしたちは話し合うコトができたのに、最初のおばあちゃんの二の轍てつを図らずも踏む羽目になつてしまつた。

けれど。だからこそ。

こんな取るに足らない程短くて。

その分剥き出しで濃密な感情を向けられた、このほんの束の間の邂逅を。

きっとわたしは死ぬまで忘れない。

否――この記憶は終わらない。わたしがいなくなつても。

「彼女の主觀は君の主觀」と彼は言つた。

この記憶は終わるまで続く。決して忘れえない一頁ページとして回顧録に仕舞われる。

わたしに恋するが故に求め、恋するが故に去つた人がいた事を、い

つかの先まで繋いでいく。

平行線がほんの少し傾いた所で、触れ合うのは一瞬だけ。後は傾きそのままに、時が経つ程に離れていく。

お互いに求めたが、愛し合うことはなく。

ほんの数瞬交わった道は、またそれぞれの未来に向かつて伸びているのだろう。

だから、重なるのは一度きりで。

このままならきっと、二度と見まみえることはない。

意思を伝え合うことはあつても、分かり合えることはなかつた。
一方通行の恋路。

ひとりよがりの決断。

でも、相手の幸福だけを祈つていた。
それで残るものがあるコトを、少し前のわたしなら信じていなかつただろうけど。

「ああ——」

隣に居ずとも。

愛ではなくとも。

自分を心から、想つてくれる人がいる。
たつた、それだけのことが。

「なんて、幸せなんだろう」

彼女の声を口づさむ。
懐かしい歌を思い出す。

触れ合えずとも彼は遙かな地平の先に。

光る海。

謳う珊瑚。

——今も、貴方に恋をしている。

解説

生命の定義 比較

本作で、変わらない（死がない＝死ぬ機能がない）ものは生命でないと述べました。

月の珊瑚では、増えることが生命の義務と説明されました。この差はどこから来るのか。

それは、私の“変わる”は個に対して視点を当てたのですが、“増える”は全体、群体に対しても重点を置いたものだからです。“事を求めているともいえます。

それを『当代で行う』か『次代で行う』かの話ですね。

ちなみに、単体と群体がイコールな存在だと、その両方を満たさずとも生命とも呼べます。

〆に詳しく述べますので、良ければ脳裏にとどめておいてください。

詳しく解説しましょう。

そもそもなぜ生命である私たちは死ななくてはならないのでしょうか？ 道徳的な話ではありません。単純に機能の問題です。

どうせ死ぬのなら生まれる意味がない――なんて考えたことは、誰でも一度はあるでしょう。

答えは単純。順序が逆なのです。

私達は生まれるから、死ななくてはならないのです。

例えばの話。何らかの原因で、人間から死が失われ、生まれる事だけになつたらどうなるでしょう？

人間は増えるだけ、減ることが無くなつたのなら。果たして世界はどうなるのでしょうか？

もし最初に100人の人間がいたとします。内訳は男性と女性が半々としましょう。これが余りなく結ばれれば、計50組のペアが出来上がります。

そのペアがそれぞれ子を為したのなら、人数は5割増しの150人になります。

無論この第二世代も子供を産みますから、次の世代は新たな50人のペアの半分を加算し175人に……では、ないのです。

親の世代が残っている以上、その親も第二子をもうけるでしょう。なので順当に増えたのなら、次の人数はそれに第一世代のペア数50を加え225人が正解です。

倍々ゲームにやや足りないくらいですね。それでも結構なハイペースですが。

ここまでめでたい話。誰も死なずただ増えるだけで子宝沢山喜び一杯万々歳…………とは問屋がおろしません。

一つ重要な問題を、不死では解決できないのです。……否、不死”だからこそ”発生してしまう問題があるのです。

その答えは”リソース”です。

それは食糧の話であり空間の話です。

仮に第一世代の5倍までを十全に賄える食料が星から常に提供されるとしましょう。

日の光や大地の恵み、飲み水等を換算し、大雑把に量にして500。これが世代ごとに再出すると仮定します。

折角なので余剰分は備蓄に回すという前提で進めていきましょう。

なので第一世代100人のみなら皆おなか一杯です。備蓄できた資源は400です。

これに第二世代が誕生したらどうしましょう？ 150人です。

まだまだ余裕です。資源は残り400（備蓄）+500（新資源）－150（消費）＝750です。

次は225人です。残りは $750 + 500 - 225 = 1025$ です。子も備蓄も順調に増えていますね。めでたい事です。

その次は338人です。残りは $1025 + 500 - 338 = 1187$ です。うんうん。良きかな良きかな。

またその次は506人です。 $1187 + 500 - 506 = 1181$ です。…………ん？ 初めて備蓄の追加に失敗しましたね？

またまたその次は759人です。 $1181 + 500 - 759 = 992$ です。結構備蓄を消費してしまっていますね。

で、ついに次の世代は1139人です。 $992 + 500 - 1139 = 283$ です。マズいです。もう底をつく寸前です。

その次は1708人。 $283 + 500 - 1708 = -926$ です。大赤字です。

不幸にもマイナスを埋める手段なんてないので、半数以上が飢えるか、消費を半分以下にするか位です。やつてられません。

更に次は2562人。もう考えるのも嫌ですね！

もう逆倍々ゲームみたいなものですね。当たり前ですが。

一度マイナスが出ると復帰させる手段なんてなく、残量を延々と希釈し続ける羽目になります。元がどれだけ矮小だろうが、世代を重ね続ける限り破綻を避けられません。

ま、実際にはここまでいきませんけれどね。それ以前に、分配する生命力の基点である食料が無くなつた時点で、繁殖自体が出来なくなりますから。

『子供を産む』というのは、想像を絶するくらいにエネルギーを必要とするものなのです。…………時に、母体もろとも事切れてしまう位には。

さて、次は生き残つた者同士でパイの取り合いになります。

その内共食いでも起こすしかありませんね。だつて食べるものが

ないんですから。

新たに提供される分で満たされなければ、既にあるモノを食べる位
しかないでしよう？

ああでもどうしましよう。素晴らしいことに不死なのです。この
段になつてはこんな傍迷惑な奇跡は他にありませんね。だつて殺し
ても死なんいんですもの。

死んだ人なんてただの肉でしかありませんが、死なない肉は生きた
人です。それでも食べるしかない。生きたままで。

そんな踊り食い、私なら遠慮したいですね。胃の中から食い破られ
そうです。どこのエイリアンだ。

ま、無理もありません。

それが形而^{かたち}上のものであれ形而^{かたち}下のものであれ、この宇宙に無限の
資源など存在しません。

私達の宇宙は閉じており、最後には無に帰る事で帳尻を合わせるの
だから。

そして。

もし無^死に帰る機能が失せたのなら、一体どうなるかなんて知れたこ
と。

だから人間を一個生命でなく社会生物として見た場合、『死』とは
本来『生』の中でも、『生』^せきる事ではなく『生』^はまれる事に付随する
機能なのですね。

◆

述べておきます。人類は完全な存在ではありません。
なのでより優れた生命になるために、小刻みにステップアップを行

います。

時に環境に適応し時に研鑽を積み時に天敵を排除し……と、段階を刻んでいく訳ですが、ここで『人類は常に進歩している』という前提で見ると、旧世代は新世代が生まれた時点で用済みになります。

それは無意味ではありませんが、無価値です。…………否、自ずと『無価値になる』。

だつていうなれば進歩するために、次の世代を更なる高みへ誘う、踏み台になる為のものですから。

だからそこを通り過ぎた以上は、もう誰も目もくれなくなる。

いらなくなつたものは、処分しないといけません。この種全体で処分する機能が、『死』な訳ですね。

もしこの機能が無くなると、先程述べた終末世界が発生します。で、この進歩も『変わる』生命機能です。立ち止まらない、安定しない。

より良い生命にランクアップするために、今の自分を塗り替えていく。

そして『増える』というのは、これを世代を跨いで実現させる機能です。

それが異性同士の配^{かけあわせ}合^{あわせ}しかり、單一個体の複製^{ぶんれつ}の突然変異^{メタモルフオーゼ}しかり。共通しているのは、新世代^{新つぎ}は旧世代^{まえ}と違うモノになる事を目的に行われるという事。

暑い地域に住んでいる人と寒い地域に住んでいる人は、それぞれの地域に適した耐性を持つていてるでしょう。

もしこの二人が子を為したのなら、生まれてきた子供は『暑い場所にも寒い場所にも対応できる』体質が期待できます。

こんなハイブリッドが生まれた以上は、型落ち片手落ちな両親なんて必要ありません。

次世代の為に食い扶持^{いな}を減らしてもらうに越したことはないでしよう。

次は……なんでしょう？ 例えば乾燥地域と湿潤地域の掛け合わせの子供と更に掛け合わせれば、4種類の耐性を持つ次々世代が期待

できますね。

或いは運動能力が高いとか、思考速度が速いとか。そういういた相手と番えば、できることの幅もより広くなるでしょう。それを延々と続けていく。

繰り返し言いますが、生命というのは本来子を為した時点で用済みになります。

なので『子を為した後も生存している生命』って生物全体から見ればかなりの少数派です。身近な例では鮭なんかが有名ですね。

苦労して川を遡つて、一度繁殖を済ませたらその時点で息絶える。他にはカマキリなんかそうですね。

オスがメスに遺伝子情報を提供し終えたらメスに食べられる。

これ残酷に思えるかもしませんが、種の存続という視点からなら極めて合理的なんです。要するに使い道のない残骸を食料資源として次代の糧にできている訳ですから。昆虫はそのあたり群体生命としての完成度が高いものが多いので、一度興味を持たれたのなら調べてみるのも面白いかと。

要するに生命の根源である生命力、繁殖力とは、如何に既存のコミュニティ、旧世代を自壊させるかのベースのことなんですね。

『より』完成度の高い新世代を築き上げる、既存の欠陥を改善しリメイクする新陳代謝、自浄機能と言い換えてもいい。

完全足りえないながらも、私達が生存していられるのはこういう事。

完全に近づいていく。その過程に存在が許される。生も死も超越し、『生物として^{いつだつ}完成』するまでは。

生命とは生命である限り欠陥品ですが、生物とは不完全ながらも完成の一種なのです。

ちなみに私達は有限の宇宙にいる有限の存在なので(つまり無限!!)

全能・完全に至れないの）、人間である限り延々と生存することになります。

『不完全として完成している』矛盾存在。

数字に上限がないのと同じで、有限の耐性も優秀さもいくら積み重ねても無限にならない。

でも積み重ねる。届かないのはわかつていてるけれど、それでも、それ人間はそういうものだから。

『終わりがないのが終わり』と遺伝子システィムに組み込まれているのはいい事なのか悪い事なのか。それは後の歴史が決める事。

まあ深く悩んでも仕方がないので（というか、どんな結論も改良された新世代に否定され得る余地があるので）、「人間は完成できない」なんて考えもいつか「それは違う！　あなたは間違っている！」と言つてくれる人が現れるのを待つて、未来に下駄を預けておきましょう。

更なる蛇足ですが、これに人間以外で優れているのがペイルライダーでおなじみ病気だつたりします。

毎年騒がれているインフルエンザなんて皆さんうんざりした顔で見ているでしょうが、実際あれは同名を持つだけで実質別物です。中身はそつくり入れ替わっているぐらいの認識で全く問題ありません。

去年ワクチンを打つたり抗体をつけたりした筈なのにたつた一年後に再びかかる様な病なんて普通に考えて存在しません。

（ちなみに生命学では暫定的に、インフルエンザを始めとしたウイルスは生命でない……という事になっています。生命は存在の最小単位に『細胞を持つこと』が暫定条件とされていますが、ウイルスは持たないので。

ですが人に感染し、それを素材に増殖・変異する以上、原作や今作の定義に見合つて言うのなら、ウイルスも紛う事無く生命と呼ぶ事ができるでしょう）

ちなみにこれは社会制度などの、自然以外の環境も含めます。

文字を生み出して、
学問を生み出して、
経済を生み出して、
宗教を生み出して……と、色々Ver. アップさせています
ね。

だからこそその問題も山ほど出てきていますが。

文字：識字率格差
学問：能力格差
経済：貧富の格差
宗教：言わずもがな

現状の最新社会モデル・資本主義も、貧富の格差を始めとした問題
がかなり積み重なっています。

まあ人間が完全でない以上、人間が創出する物だつて完全足りえない
のが道理ですし。

資本主義って能力主義と言い換えますが、その上で問題がある
のなら普通は「人間は能力が全てじゃない！」一人一人を平等に扱う
べきだ！」ってなりそうですが、それを標榜していた旧世代モデル・
共産主義がコケたので、次世代モデルはかなり五里霧中みたいです。

（ちなみに共産主義が廃されたのは、ひとえに徹底的に効率的ではな
かつたからです。

人間つて全員能力が違うのに、同じように扱おうとするとかなり無
理が生じます。高校や大学に偏差値や学部を設けず、教える内容全部
統一するみたいなのですから。この時点で『適材適所』という概念
が一切考慮されなくなります。

それに向き不向きはどうしても出る。でも頭数で平等を考えると、
能力差はあっても報酬・給与が同じになります。

……能力差が加味されない（＝能力を上げるための努力が報われ
ない）のに真面目に勉強する人なんていませんよね。

結果誰も頑張る人が居なくなつて経済成長とかが滯りまくり、国内

の生産率がダダ下がりして諸外国と差が開き過ぎてしまつて……と
駄目な事続きだつたので、ソ連を始めとした共産主義国家は「ごめん
この主義無理」と撤回を申し出ました。それが俗にいうソ連崩壊。
無論これだけが理由ではありませんが、原因の一端を担つていたの
は間違いありません。

以上ちょっとした歴史背景でした)

頭数の平等では駄目で、能力の平等も不具合ありとくれば、次はど
んな視点で平等を掲げる制度になるのやら。



水は、そのまま置いておけば淀んで腐る。何をするまでもなく。何
もしていらないのに。

元の”水”は死に、それを苗床に新たなものが生まれる。
水を素材に細菌が繁殖し、次第に”腐つた水”という新たなコロ
ニーが出来上がる。

そうして生まれた細菌を苗床^{エサ}にまた新たなものが生まれる。

突然変異だつたり、外部からの侵略だつたりと要因は様々ながら、
刻一刻と変化し変動し違うモノに入れ替わっていく。

では仮により厳重に、徹底的に滅菌した上で密封したのなら。
その水はどうなるでしょうか？

きっと、何も変わらないでしよう。

何もしていらないのだから。

息を、していらないのだから。

生き^{いき}生を、していらないのだから。

中にある生命生物を全て滅殺しきつたのなら…………要するに全

てが死骸と変わらない。

奪う事も奪われる事もない、死の閉鎖世界。

ですが仮に自分だけで完結し、なおかつ“生きているもの”があるとするのなら——それは正真正銘、“繁殖も”^{ふえること}“変動”^{かわること}もしないにもかかわらず、生命であると断言できるでしょう。

自分で循環するもの——

何者にも奪われる事がないほど強く、何者からも奪う必要が無いほど強い。それを寂しいと思う弱さすら、無い何か。

まるで神様のような、完成した命。自分で完結し、賄うモノ。

時に神とも崇められる、幻想の頂点。でも神とは違う、生命の頂点。肉持つ幻想。

それを一般では——龍、と呼びますね。

龍は神話上では河の氾濫が元になっているものが多いのですが、それは水という生命に必要不可欠な液体がモチーフなのは偶然ではないでしよう。

生命に必須なもの^{そのもの}自体を擬神化した結果。

冒頭に述べた、『単体と群体がイコールな存在』。ただ一つで種を為し得るモノ。

ウロボロス
尾を喰らう蛇を始めとして龍の類が永遠の代名詞とされるのは、

『生きていたがら』奪わないし奪われない、生死を超えた理想の完成形・集大成だから………という面があるのでしよう。

登場人物

珊瑚の姫

【人物背景】

人間を見捨てた彼への罰。美しいヒトのかたち。

原作における語り部の少女。『満月の夜に光る海』の島のお姫さま。その美貌と珊瑚の海の光に惹かれてやつてくる求婚者を無理難題で追い返す、現代のかぐや姫。ただし本人には悪気も嫌味もちつともなく、単に語られる愛に理由を求めるタイプだ。

生きる為の知識は遺伝子で、暮らす為の知識は口伝で継承される。それぞれの姫の性格は誕生時、月の満ち欠けでちょっとずつ違うという。

デザイン姿は「坂本さんとアルクが混ざった感じ」とのこと。たい体躯は割と華奢で、充分に少女らしい。

イメージカラーはどこかくすんだ亞麻色。完結を放棄した物語の続き。夢見た石のひとかけら。永遠だったものの忘れ形見。

物書き然り、『彼女達』の学習・順応能力が異様に高いのは、「珪素姫が元々人とコミュニケーションを取る事を前提に組み立てられたので、その為の手段の習得に対し自ずと長じる』……という解釈。外部入力機能で獲得した知識データは出力にも転用できるだろうとの認識。始祖ですら叶わなかつた『読み書きをも習得して見せる』という、実に生命らしい変化を為した。

望まれて生まれたのに、生きることまでは望まれなかつた命自身の望みのすがた。

まだ人間にはちょっと遠い。

魔術師の青年

【人物背景】

自分でしかない誰か。人でないものを見捨てなかつた報い。

幻想が意味を持っていた時代の末路。魔術特性は『生誕』。人類最

後の魔術師で、万能である代わりに”唯一ではないもの”に価値を見出せない。

容姿^{デザイン}は成長した愛歌の色違い。ただしロングヘア。線の細さから一見女性と勘違いしかねないけれど、声の低さでなんとか男性と分かれるタイプ。

イメージカラーはあらゆる色を拒絶した純白。終末を告げ終えた鐘。踵も焼かれたアキレウス。^{ひどつ}絶対ではいられない人の罪業。

世界に関心を持つていたが、だからこそ向き合つて傷付けるのを恐れ、結果として「相互理解」を断念した。その身の白さと装いの黒さは自らの潔癖性^{ヒトト}と世俗の色、その重なりを拒んだ姿の表れ。

互いに穢し合う事も奪い合う事もない断絶、混ざる事も交わる事もない並行故に両立する矛盾の具現。^{こう}——その禁を破った経験^{ばつ}は、拭えぬ哀愁として神経に刻まれる事になる。

他者の望み通りに生き続けた末に、自分の^{ユメ}望みを抱く余地を失った命のカタチ。

もう人間からはだいぶ遠い。

余章

月が煌くいつかの夜に

ふと、目が覚めた。

冷たい夜。

閉じたような世界の果てで、夢を見ていた。

霞がかつた意識のまま本能的に、ぼやけた目で周囲のあたりを見渡す。

眼前に広がるのは、歪んだ瞳でも変わりないと一目で気付けるほどに見慣れた景色。

威圧するように何本も屹立し、階層と天井を支える柱も。只人には足を乗せることすら憚られそうな豪奢な絨毯も。それら全てを上座から睥睨する、自分が腰掛ける玉座も。まるで舞台の一幕のようだが、生憎と舞台ではない。

そんな生半な作り物ではないし、それを見に訪れるものもいない。ましてや、観客の座る席などあろう筈もない。

…………別に、どうという事もなかつた。

特筆すべき変化など欠片もないし、取り立てて騒ぐ価値ある物もない。ああ、全く持つて平常運転。いつも通りだ。

見慣れているのも当たり前だった。

ここは紛う事無く己が住処で、来訪者を迎える謁見の間。魔道の頂点が君臨する玉座を讃える白室。

一時はこの身を縛る呪縛を断ち切り飛び立ち。

そして――どうしてか戻つてしまつた、自分の家だつた。

斜めに注ぎ込んでくる明かりに微かに目を細める。

空を仰ぐと、飛び込んできたのは四角く切り取られた天井から見える蒼白の威容だつた。

嵌め込まれたガラス^{ガラス}を通り越して届く光源につい視線を奪われる。夜空の大半をふてぶてしく占領する真円の姿はどうにも頬もしい。どうやら、座つたままに束の間の眠りに堕ちていたところを、無言のままに起こされたらしい。

「ああ――今日は、満月なんだ」

閉じ切つた沈黙に、振動^{おと}が広がる。

ふと動きを止めれば、耳を欹^{そべだ}てるまでもなく、大気の掠れる音すら聽こえてきそうな程の静寂が満ちた。

流れる空気は「生きる」という不純を拒みそうな程清潔すぎて、広大な空間にも拘わらず肌^{そと}と肺^{なか}の両方から圧迫される。

もつとも。

そんな静寂を苦しく思う生き物は限られているのだが。

当たり前だ。ここには誰もいない。

ここで動くイノチはない。言葉を話すモノはいない。熱を持つヒトはない。

誰も、誰も。

己以外には、誰も。

ふと手元にかかる重さに目をやると、そこには見慣れた一冊の本が

収まっていた。

月の物語を記した一編だ。

かつて恋した少女が、手すから記してくれた一編だ。

私の、大切な宝物。

意識するまでもなく、それに手をかける。慣れた動作。流れるよう
に自然な動きでおもむろに開いた。

時間をかけて細部まで丁寧に読み込み、背表紙まで念入りに眺めた
後、ぱたんと閉じて、瞼をつぶり追憶に耽る。

正しく月並みで、変わり映えのない、変える必要を感じない日課。
これがこの城で何度も繰り返した、穏やかな日常だ。

それが一体いつからだつたか。

こうして気が付くと、一冊の本を読み返すのが日々の定番になつて
いた。



『満月の夜に光る海』を飛び去つてからしばらく。

私は捨てた筈の出処に帰郷していた。かつての第十七都市。

彼の島を発つて、いくつかの土地を巡つたものの、余りに鮮烈なあ
の出会いの味わいに負けてしまつたのか。

押しかけた場所で新たに知つた物語達に驚愕を覚え心を波立たせ
ることはあれど、胸に響くものは一つもなかつた。

どうやら。

あの島の出会いに――私は満足し過ぎたらしい。

今でもふとした拍子にあの夜を思い返す。

恋した少女と別離を刻んだ夜を。

そうして気付けば、またこの本に指をかけている自分が居て。

何度も何度も隅から隅まで眺めた。

細部までもぬかりなく、文字の癖から些細な染み一つに至るまで記憶している。

今更、未知^{みりょく}を感じる要素などない筈だつた。

にも拘らず、繰り返し読むことを止めようとは思わなかつた。だから、少なくとも今が今であることに不満を持たない間は。

この刺激に慣れ、感動が薄れるまでは。

何をどうしたところで、きっと野暮なだけだろう、と。

生きているからには——いづれは霞み、傷み解れ、霧散していくと。

いつしか飽き、退屈に思える日が来るだらうと知つているから。

せめて、そうなるまでは。

この一片を、愛で続ける事に決めたのだ。



幽かに、月光が途切れた気がした。

雲隠れとは違う不自然さに思わずソラを仰ぐ。

虚空を湛えた死の世界。

夜闇に開く幽谷への入口。

その白銀に、そぐわない黒い塊が横切ったのを見た。

「……ああ、また彼女に求婚者が出来ていたのか」

ぼろりと嘯く。

月光を遮つて浮かびあがる、魔術師わたくしに次ぐ最後の文明。あるいはその名残。

彼女曰く、あの島は空から飛んで訪れる必要があるとの事だつた。確かに私以外には、あんなものでもなければ難しいだろう。そして、こんなご時世に飛行機を飛ばす案件など、きっとそれ位だろうから。

「自分が何もしないと世界は何も変わらない」なんて台詞があるが、その実大した思い上がりだと思う。

それは世界が自分だけで構成されている場合ケースだけの言い分だ。自分が何をするまでもなく、世界まわりは動く。生きている。変わつていく。

舵取りを放棄する以上、望む方向からは程遠い方向に逸れていくのが多いのは否定しないが。

苦笑する。

私はこうして時を重ねつつも、何一つ積み重ねてはいないけれど。自分に実感がないだけで、確かに周りは動いているのだ。こんな時代でも、情熱を忘れず生きられる人はいる。

遠い彼女と、同じように。

銀月に僅かに被さる様にして空を射抜く鋼の機体を見遣る。

彼女はまた、袖にしたのだろうか。

それとも、今度こそは――――――

…………そうして結論付ける前に、思考を無理やり打ち切った。

所詮果てまで導いた処で推測の域を出ない。それにどちらにせよ、悪い結果ではないのだ。

斜に構えた所があるようで、根っここの部分は本当に素直な子だったから。

…………悔いは、ない。或いは、諦めだつたのかもしれないが。
こうなると理解わかつっていたし、それを承知で成り果てた。

決して望んだ結末ではなかつたが、それも仕方のないことだと納得たつかんしていた。

「ああすればよかつた」なんて幸せすぎるI.F.、とうの昔に考え尽くしている。

…………それを決して、自分は選ばなかつただろうという事も。

瞳を閉じる。月光を遮る瞼の裏で、泡のように浮かんでは消える記憶の粒。

光を放ち弾ける姿は一時だけ瞬く星のよう。
朧げに姿を変え、また次の明かりを灯していく。

ああ、でも。

もう一度だけ、思う。

もしあの時、彼女の手を取つていればどうなつただろうか。

飛び去る事を止めて、それを願う事は、できただろうか。
恋した少女と隣り合う未来も、あつたのだろうか。

もしも。もしも――……

「――なんて、ね。

もしそうしていたのなら、その時点では彼女は無価値になる。
そんなこと、赦せるはずがない」

知っている。

どうせ、そうやつて手に入れたものは――望んだものではなく
なるのだ。

日本の御伽噺の一つ。

龍宮伝説・浦島太郎。

虐められている亀を助けた礼に龍宮城に招かれ歓待を受けるもの
の、故郷を偲び俗世への帰郷を望む話。

彼は図らずも得た幸運で、永劫過ごすことを赦された楽園を、己の
意志で後にして。

誰もが羨む理想郷への滯在権。何故ソレを彼は捨ててしまつたの
か。

――人は心が伴わなかつたり、容易く手に入れた物にそこまで
強い思い入れを持てない。大事に、できない。

私にとつての魔術の産物の様に。月の珊瑚の全能性の様に。

もし、『月のサカナ』なんていう、あんなどうでもいいものと引き
換えに彼女を手に入れてしまつたのなら。

その時点で彼女は私にとつて、その『どうでもいいもの』と等価と

いう事になつてしまふ。

「かけがえのない」という、何よりも尊い価値を失う。

私に唯一、理解できる価値を喪失する。

…………私は恋し、誰よりも憧れた彼女を、そんなつまらないものにしたくはなかつたのだ。

あの空に瞬く月と同じだ。

星ほど隔てた遠目からではなめらかな真球でも、表面に降り立てば無数の凹凸に彩られている。

届かないからこそ、その美しさにだけ憧れていられる。

想像とはどんな現実より美しい。それが現実に出力できた時点で、その意義を見失うとしても。

きつと私の祖は――それを百も承知で、望みをカタチにする魔術^{すべ}を、必死になつて求めたのだろうから。

そしてその術^{すべ}を手に入れた所で、『実行したいかどうか』は、また別の問題。

「……なに。こんなにも変わり映えのない生活をしているんだ。

いつかは変わる筈の想いが潰えるのにも、それなりにはかかりそ^うか」

玉座に深く腰を下ろし、もう一度強く目を閉じた。

選択の時は去つた。

惜しくはある。

その上で、これがベストだと思う。

ただ――――認めて尚、こんな結末が最善だという事実が、残念なだけ。

でも、それでいい。

私は私といる彼女の幸福より。

私でない誰かとの幸福を願つたのだから。

自分で無価値に墜とした物を手に入れるより、
価値ある物が誰かの手に渡ることを是としたのだから。

(ふふ…………本当に、月の様な少女だつたな)

あの空の月は別に満ち欠けで、本当に抉られたりはしない。
単に陰りで見えなくなつてゐるだけ。それもまた一時の事。
欠けた月はいすれ埋まり、遍く一切を照らし上げる——輝く満
月になるのだろう。

彼女にそんな日が来るのがとても楽しみで。

それをこの目で見られないのが、少しだけ惜しかつた。

省みない想いを向けるという意味では、私もある二人の子だつたん
だな、と。

どこか納得してしまえる自分が居て。

そんな思いを抱えながら体重を預け、拗ねる様に意識を閉じた。
取り留めのないものを取り留めのないまま置き去りに、睡郷へと
沈んでいく。

別にいい。

何か焦るような事もなければ、急ぎたいほど熱意を引かれるものも
ない。

そうやつてずっとずっと。立ち止まつて過ぎ去つた時間を眺めて

いた。

だつてもう、私には叶えたい願いも、叶えて良いと思える願いも、何一つなかつたのだから。

あの島を去つてから本当に長くて、本当に短い時間を過ごしている。

一冊の本に退屈することすらできない程度の刹那だつたようにも、一冊の本を味わい尽くすに足りない永遠だつたようにも感じられる。

そこに前の頁^{ページ}と変わらない一節が刻まれようと/orするその狭間で。

ガタガタ、と。

静寂を破る、らしからぬ無粹な物音を聴いた。

軽快に歩を進める誰かの靴音。

最初はほんの僅かに地を伝わる波だつたが。耳を澄ませるまでもなく、音は次第に大きくなる。

これは——近づいてくる？

「…………？」

誰だろう？ 私は本気で疑問に思つた。

こんな辺鄙^{へんび}を縦に三つ重ねたような所に用がある者など思い当たらない。

…………そもそも現代で『用がある者』自体が希少種だ。

加えて、まだ覚醒しきっていない微睡みの名残が残った頭では答えを出す暇もない。

そんな曖昧な答えすら、出さないままの答え合わせが始まった。

ぎぎぎぎ、と、重苦しい音を立てながら。

扉は開いた。あつけなく。あっさりと。

「——あ、見つけた。ここにいたのね」

柔らかくも空間に響かせるだけの高さを持つ、鈴のような女性の声。

この声を知っている。私が知らない訳がない。

「こんばんは。いい夜ね」

微笑むのは、いつかの亜麻色の彼女。

自分が恋し傷付け、惜しみながらも未来へと送り出した、あの冴え渡る、完全無欠の天蓋より尚恋しい、

まるで、欠けた月の様な少女が、そこにいた。

——その姿をこの目で見て、私はこれを夢だと思った。

この景色を夢だと思った。

本当に、夢のような光景だつた。

覚めたつもりでいただけで、未だ夢の途中だと。

…………だつて、こんな絶対におかしいし。

夢に溺れるなんて文化は遙か昔のことだつた筈だと、その声を朧と無視して、また瞼を閉じようとする。

夢の中で寝ようとするのもどうかと思うが、まあ、他にどうすべきかもわからなかつたのだ。これくらいは容赦して欲しい。

だが生憎と、その程度で霧散するようなものでもなかつたらしい。つかつかと歩み寄つてくる音が響く。私しかいなかつた場所に。遠くは私すら、居なくなつていく筈の場所に。
私でない者が、足跡を刻んでいく。

足音が、手前で止まる。

…………なんというかもう、降参だつた。ああ、本当に夢のようだけれど。

どうやらこんな都合が良すぎる一幕は、幸か不幸か現実らしい。

諦めて目を見開く。

息を呑む。

見間違える筈もない。あの時から幾度も幾度も思い返した姿だ。

その白い体躯も。

例えようもなく整つた顔立ちも。

そして、まるで珊瑚^{コーラル}の宝石のような瞳も。私は憶えていて。

その面影を確かに残しながら、彼女は前と違う彼女になっていた。

かつては正しく少女だったが、今はそう呼ぶのもやや躊躇うくらいにずいぶんと大人びているように見える。

手足も背丈も伸びているし、その華奢だった体躯も女性らしい丸みを帯びていて。

以前は何処となく幼さに欠けた雰囲気だったが、顔立ちからも未熟^{あお}さが幾分か抜け、充分に『女』を感じさせる相貌になっていた。

欠けた月の少女は埋まらないまま、大きく、輝きだけを強くしてい る。

そんな月光を力タチにしたかのような、妖精かと見紛^{まが}う女性が、今 目の前に立つていた。

その事実を眞^{夢ではない}実と認めた上で、想像と納得の齟齬で理解が止まる。思考の歯車に異物が噛んでしまっている。

久闊^{きゆうかつ}を叙^{じよ}するような余裕はなかつた。

挨拶を返す事すらままならない。ギチギチと歯車は軋みを上げた まま、押し潰したような声が口から漏れた。

「君、どうして――――ここに？」

どうやつて、とは訊かなかつた。あの島に渡るには空を飛ぶ術があ ればいい。

同時に、この都市に来るのも飛行機の一機でもあればできるだろ う。

覚束ないなりに今の状況を検分すれば、あの時月を横切つた鉄塊は その為の物だつたと想像はつく。

だから、問題は。

彼女がなぜ、ここにいるのか。
ただそれだけが、疑問だつた。

「ええ。単純なことなんだけど」

間近で聞く声は、現は夢より鮮やかで。
続けられたのは、たつた一言。

「…………求婚しに来たの。貴方に」

想定外に過ぎたその言葉に、再び思考を停止させられた。

◆◆◆◆◆

時を、少し巻き戻して――

旧：第十七都市。

かつては人類の使命の片割れである蘇生セクションを担い、最後の
神秘の集大成を作り上げたその残骸。

そこに、奇妙な一団が来襲していた。

飛行機から降りて先陣を切る、見目麗しい女性と。

それに付き従う、着物の装いをした妙齢の二人。

「じゃ、行つてくるわね」

そう言うが早いか一人突き進む女性。それを引き止めるような、焦つたような声が響く。

「ひ、姫様！　本当にこんなところに目当ての方がいらっしゃるのですか!?」

「多分ね」

「多分つて……」

「イセ、うるさい」

「あなたはなんでそんなにのんびりしていられるの！　スイ！」

アリシマ様にもご迷惑をおかけして、もう……！」

やるせない感情を無理やり吐き出した溜息は、もう何度目かもわからぬ。

何もかもが予想外でついていけそうになかった。挙句の果てに開始の号令すら疾^とうの昔に鳴つていたという話。

いつの間にこんなにも置いてきぼりにされたのかと啞然としそうになる。が、そんな暇はない。

事の発端すら思慮の外。なら、せめてこれ以上差をつけられないようになくては。

気付かないうちに姫が側近の自分が知らぬ殿方と丸一月も逢瀬を重ねていて、しかもふられていたなんて聞いた時には度胆を抜かれたものだつた。

——その殿方が、彼^かの難題を解いていたという事も。

それはいい。いや、決してよくはないがまだ許容範囲だ。

今まで散々断つてきたのだから、図らずも内密だつた一件が破談になつたところで問題にはならない。

あちらから断られたというのも、別にいい。思うところがあつても

些末程度。

問題は。

あれだけの無理難題で数多の求婚者を拒み続けたこの姫様が、自分をふつたその殿方にご執心だというのだ。

しかもその殿方の居場所はあつちこつちを飛び回り、行方知らずなのだという。

そこで膝を折る材料は十分だったのに、だからと言って諦めるつもりは寸毫もないと言わんばかりの、姫らしからぬ活力に溢れた姿には思わず愕然とさせられたものだった。

しばらく前の事。

ここに来るまでの準備として、過去の求婚者達を招き一堂に集めての演説。

『わたしにはもう添い遂げると決めた殿方が居ます。

誰よりも先に、わたしの難題を解いた方と』

『わたしはその方を迎えに行きます。そしてその為に必要なものがあります。

どうか、恋焦がれる人に今一度会う為に、力を貸してください』

『わたしに語った愛が真に事実なら

わたしを真に愛しているというのなら。

愛される事も報われる事も省みない程視野に入らない程、愛おしいと思つたのなら』

『わたしの手を掴めたのに、そうしなかつた人は、それがいいのだと言いました。

願いを叶えて宝を捧げて見返りを求めず、自分以外の者と幸せにと、願つてくれました』

『わたしはそんなあの人には――』

その言い分を聞いた者達は、一人を除き一様に顔色を変え、形容しがたい顔のまま去つて行つた。

私は、立ち去る者達を引き止めなかつた。

無理もない。

何処の誰が、報われない想いに多大な労を費やして、負け戦の当て馬を引き受けてくれるというのだろう。

誰よりも親身である世話役の自分ですらそう思うのだ。

自分に求婚アプローチをかけてきている相手に、恋患つてている相手の元へ行くまでの飛行機まで強請るなんて本当どうにかしているとしか思えない。思い出すだけで頭が痛い。胃がきりきりと悲鳴を上げる。

次第に、彼らは席を立つていき。

一刻と掛けず、部屋は占領された箇所が取り除かれ、ありのままの広さをほぼ取り戻していた。

そして最後に。そこ

自分が知る、最も新しい求婚者だけが、残つていた。

◆◆◆◆◆

「アリシマ様。本当によろしかつたのですか」

堪らず主人に声をかける。

側仕えらしからぬ不作法だが、それでも。黙つてなどいられなかつたのだ。

「ああ。勿論だとも」

陽気な声。

不羨^{ぶしつけ}を咎める事無く応えてくださるのは恐縮だが、『それでいい』という言葉の真意は読み取れなかつた。

視線だけでもう一度聞いてみる。どうしてでしようか、と。

——あの姫君の宣誓からしばらく。

今日この日に至るまで。この主が、どれだけ精力的に活動したのかを知つてゐるからこそ。

それだけではない。一連の為に各方面への作つた貸しは、側近の自分だからこそ全貌を把握している。

こんな時代に飛行機を一機融通するのには、多大な財とコネを要した。

加えて方々を飛び回り行方知れずだという、魔術師なる得体の知れないその青年の居場所まで探し当てるのだ。

主人は人類復興委員会の中でも輪をかけての大物だが、それをして決して軽くはない散財である。

そこまで尽くした結果が報われないというのは……

しかしながら主人の言は、そんな独白をあつさりと掃う。^{はらう。}

「良いのだ。姫がそこまで熱を上げているというのなら、私は潔く身を引こう。生木を裂くような無粋な真似はしたくない。

もともと求婚自体は難題を解いた者の早い者勝ちで、私はそれに届く見通しすら立たなかつたのだから。

それに……姫が誰と結ばれたところで、委員会の任は果たせるからな

…………それも、事実だ。

今の人類の使命は、彼のか島の姫が誰かと結ばれる事。

人類の希望はあくまであの島であり、アリシマ様といえど、どこまで行つても一求婚者でしかない。

姫様の難題は、解く為のとつかりすら見えない程に支離滅裂だった。

その姫様の方から恋焦がれる相手がいるというのなら、誰もが結ばれる当てすらない以前よりかは随分と前進したと言えるだろう。

だから現状はその使命に沿つてている。沿つてはいるが……やはり、納得はいかなかつた。

かつての、あの姫君への主人の返答を思い出す。

『貴女の願い、確かに聴き受けました。

どうぞお任せください。必要なものはこちらで一切を不足なく工面致します。

お望みのものを全てご用意して見せましょう』

『ただ、一つだけこちらもお願いがござります。

それら全てを揃えた暁には――――私の愛を、信じて下さいますか』

『その愛に応えて欲しいとは申しません。既に心を射止めた殿方がいると確かに伺いました。

その上でただ。認めて頂きたいのです』

『かつては測れなかつたという

――――私の、愛を』

それだけが主への報酬だつた。

納得はいかない。…………大体、今更認められても、どうだというのだ。そう思う。

認めた所で受け入れられないのなら、それは徒労と変わりない。袖にされるのを前提で、なぜそこまでするのかと。疑問は晴れない。

い。

だと、いうのに、主人は変わらず喜ばしそうだった。

「なに、そういうたいしたことでもない。

お人よし、というよりかは……惚れた方の弱み、なのだろうな。あんな難題をこなして見せる者が現れるとはついぞ想定していかつた。

だから周りもそうに違いないと、状況に胡坐あぐらをかいたのは私の責任だ。

それに…………」

くくっ、と声を立てて笑い、未熟な果実を眺めるような眼で私を見る。

懐かしむような、慈しむような。とても微笑ましいものを見る瞳で。

視線を切る。どこか遠くを眺める様な目で、満月の昇る空を仰ぎ。欠片よども淀よどむ事無く、言葉は続けられた。

「恋に破れたからには潔く身を引き、

惚れた女性には省みることなく尽くすのが――『いい男』といふものだろう?」

◆◆◆◆◆

「唚然^{あぜん}とした表情の彼。」

その面持ちはびっくりとしか表現できない。

そんな表情を引き締める事無く、たどたどしく言葉を紡ぐ。

「求婚、つて…………」

鸚鵡返しに彼の口から音が零れた。その姿を見て、つい嬉しくなってしまう。

我ながら完璧な不意打ちだつた。…………いつかの仕返しが、今になつてやつとできた。

今まで言いたくてたまらなかつたことが、今になつてやつと言えた。

それが、とつても誇らしい。

「私は君を――愛してはいないよ？」

愛が欲しかつたんじやなかつたのか、と。

確かめるように、詰る^{なじ}ように。問い合わせてくる。

氣を揉んでくれるのは嬉しいけど、要らない心配だつた。

もうその件は、自分で決着がついてる。

「いいの。今まで愛しているつて言つた人と、愛してないつて言つた貴方と、正直違いが判らなかつたし。

貴方が言うように、わたしは愛を必要としていないのなら、それはもういいかなつて

あつさりと卓袱台^{ちゃぶだい}を割るような返答を告げた。

拍子抜けしたような肩透かしを食らつたような、茫然とした表情の彼。

「貴方がわたしを前にふつたのは憶えてるわ。
――でも、今もそう?」

生命は変動するものだつて言つてたでしよう？

あの時の貴方にはふられたけど、今の貴方にはどうかしら？

片目を瞑つて、悪戯っぽく問い合わせる。

後は、彼の答えを待つだけだ。

この告白が、どうなるかなんてわからないけど。

受け入れてもらえたらしいなつて、そんな都合のいいことを思う。



彼女の言い分に絶句する。

確かに、そんなことを言つた覚えがある。

所詮個人も人格も、流れる時間の前では曖昧でしかない。

脳内の電気信号は一秒ごとに配列を組み替える。

生命は変わり続ける以上、名前はただ連續するだけで、中身は一瞬
しか持たずに切り替わっていく“別人”だ。

なら。

私は今まで唯一以外に価値がないと思つていたが、それら全ては連續して見えるだけで、どれもがかけがえの無い唯一だつたという事ではないのか。

なら、それは嬉しい。とても喜ばしい。

あんなにも恋い焦がれた少女が、彼女の方から求めてくれたのだ。
だから一も二もなく、それを了承しようとして。

——ぐらりとした眩暈^{めまい}に襲われる。

続いて心の臓腑ぞうふに氷柱つららを刺し込まれたかのような錯覚。のぼせ上あがつていた頭が無造作に搔き乱されたのち、一瞬で芯まで冷却される。

どう返事をすべきかなんて、わかつていた。

自分がどうしたいのかも、十分にわかつていた。わかつて、いて。

ああ、それでも

「嫌だ」

それでも、口を突いて出たのは拒絶の言葉だった。

なんてことはない。ただ、思い出しただけだ。

自分がどんな生き方を選んだ生き物だったのかを

「以前も断つた筈だ。

「何で君に、応えないといけない」

往生際が悪いにも程がある台詞だった

心の事は、どうぞお聞かせください。

その要望に応える事がどんなに満たされて虚しいのか、わかつてしまつてゐるから。

「なんで？　わたしの事、嫌い？」

「君の方こそ、なぜ私なんかに執着する。

言つた筈だ。君に相応しいものは、待つてゐるだけであの島に揃う。

「私でなくていいのに、何で私にこだわる。君らしくもない」

俯きながら吐き捨てる。

彼女が今、どんな表情をしているかはわからない。意図せずだったがそれは幸いだった。

その顔を見たくない。辛すぎるだろう。そんなもの。

だつて、そうだ。

私には――何もできないのに。

何でもできるから、何もかもに価値がないのに。

そうだ。私は無価値だった。

価値があるのは私の立ち位置だけで、私はそれを守らされている番人でしかない。

その立ち位置すら、"魔術師"なんて言う人でなしの願いを叶えるだけのもの。

彼女は違う。

人の理想である星の化身が人を望んで、それを叶えた願いのかけら。

私のような紛い物とは違う。真に価値のある人の理想。その体現。

全てを見捨てなかつただけで、その実、自分の全てを取り零した青年がいて、

全てを拒んでいたようで、その実、何一つとして無視しなかつた少女がいた。

輝く海と煌く月の狭間に、穏やかな夜が満ちていた島で。己の歪さと真逆の尊さを見た。

なのに。何故。

「私が手にする者は皆——無価値に落ちるしかないとい
うのに」

恋した君をそんな下らないものにしろと、私に言うのか。

嘆くように吐露した言葉は、彼女にどう届いただろう。

また無価値なものを手に入れるのかと思つた。

誰もが欲す宝石を、よりもよつてなぜ私に宛がうのか。
どんな財宝も石ころにしか思えない自分などに委ねるのか。

彼女をそんなどうでもいいものにしたくなかったから、あの島を
去つたのに。

何故、今になつて彼女を、自分の手で貶めなければならぬのか。

どうしてそんな選択を、また自分に突きつける——！

「いいじやない、別に。価値なんてなくつても」

届いた言葉に凍り付く。次いで恐る恐る顔を上げた。

それで漸く、先程まで直視を拒んでいた、彼女の顔が目に入る。

断りを入れた以上はそれなりに衝撃を受けていると思つたのに、彼女は先程より一層柔らかな、見るものを穏やかにするような笑みを浮かべていた。

まるで夜の中天に坐す月の様な、決して人を害さない、それでいて絶対的に揺るがない自信を備えているように見える。

その自信の出所が、根拠がわからなくて困惑する事しかできない。

…………自分の知っている彼女は、こんな顔をするような人だつた
だろうか？



顔を上げた彼の顔を見返すと、意図せずとも自然に目が合つた。
そこにあるのは不可思議と申し訳なさ。それらを一杯に湛えた彼
の顔は、涙が零れていないだけで、まるで泣いているみたいに見えた。
それを見ると、しようがない子供を見るみたいな気分になる。特に
後ろめたさみたいなのは欠片も湧いてこなかつた。

…………うん。自分でも身勝手な事を言つてるとと思う。
そんな顔をさせるような事を言つたのも確かにわたしだし。
でも、言いたい事が言えた。

彼は一つ失念してる。彼が気付いていない事を、わたしは教えてあ
げられる。
それが解つてるから、ぶれない自信を持つて、こうして彼と向き合
える。

「わたしが無価値になるつていつたけど。
わたしが無価値だと、何か困るの？」

「何か、つて……」

「貴方がわたしを愛してないのも、知ってる。
それでも、わたしはいいの。わたしが愛を必要としているといつて
言つたのは貴方。

「貴方は、違うの？　わたしに価値がないとダメ？」

「…………、…………それ、は」

そうだ。彼が固執するだけの価値が“価値”にあるのか。それを彼は忘れている。

説得力は折り紙つきである。何しろ実体験だ。

わたしは愛を求めてないつて教えてくれたのは――他ならぬ貴方でしよう?

わたしが愛を求めていたのだって、それをうまく想像できなくて、それを知りたかったから。

だからそれを知らないと知った今、そもそも、そこまで固執したい理由の方がなかつたのだ。

理由なんてわからないけど。愛じやないかもしれないけど。

でも、愛の存在証明に、難題が役に立たないのなら。愛を条件にしないのなら。

だから、最後に残つたのはそれだけだつた。

だから、それだけが望みになつた。

だから――

「わたしには愛が必要なくて、その上で誰か一人を選ぶなら――わたしは貴方がいいと思つたの。

貴方は、そうじやないの? そう思つては、くれないの?」

我ながら自分勝手なことを言つてるつて自覚はある。自分がそうちからつて。相手もそうちとは限らない。

でも、それでいい。

あの月の物語を記した時みたいに。

同じものを知つて、同じものを見て。

全く違う結論を出したとしても。

それを、違つてることを悪いことだと思わない。

だから――お互い違う者同士で、違うものを見比べて。

全く同じ結論を出したとしても。

それでも別に、いいんじゃないかと思う。

でも、もちろん。

「貴方は、本当に価値がないと認められない人なのかも知れない。

い
だからわたし嫌なら
もう一回ても何回ても
断ってくれてもい

そういう一つ一つ一回や十回断られた程度で、諦めるつもりもないけれど。

あの月の物語を覚えている。

お互いを想い合っていたのに、一緒に居なかつた人を知つてゐる。折角知つてるんだから、その結末が気に入らなかつたのなら。自分が感情移入しきれなかつた、あの執筆の時とは違う。その最後だつて納得いくよう、いくらでも頑張ればいい。

同じ失敗をしないように、知識は活かさないと。

「でも」——できれば、応えて欲しい。

なんの価値もないけど、そうしてくれると、きっとすごく嬉しいわ。

……わたしも、貴方も」



「

思考が、止まる。

向けられた言葉がどうしようもなく胸に沁みる。

『貴方がいい』

それは、あの時聞きたかつた言葉だった。
そして、聞けなかつたはずの言葉だった。

それを言つてもらえた今が、どれだけの奇跡の上に成り立つている
のかを、もう一度噛み締める。

振り返つて、思う。欲しいものはあつた。こんな自分にも。
気付かなかつただけで、叶える資格がないと思つていただけで、叶
えた時点で無価値になるのが嫌だつただけで。望みはあつた。確か
な一が、ここにあつた。

仕方がない、と。満たされない切なさを、今までひたすら諦めだ

けで埋めていた。

そうして塗り固め、押し止めていた本音が溢れ出す。

——独りは、寂しかつた。

最初は置いていかれて。両親は私を見届けることはせず、この世から去つて行つて。

二度目は置いていつて。私では彼女の理由^{あい}に相応しくなくて、自分から身を引いて。

そしてまた、独りになつた。

それが寂しかつた。

孤独そのものよりも。

自分の為と相手が手を放していく事を。

自分が孤独になると知った上で手を放される事を。
自分は繋ぎとめる未練^{りゆう}になれない事こそを、何よりも「寂しい」と呼ぶのだと知つていた。

彼女は違うのに。

私とは違うのに。

私が置いていつたところで――私がいなくなつたとしても、孤独になどならなくて。

それでも『私がいい』と。

私である必要は、どこにもないのに。

それでも必要ない筈の私を追いかけ、こんな星の果ての辺境にまで、迎えに来てくれたのだ。

(ああ、私があの島を去つた時、君も寂しかつたんだな。
私を惜しんで――寂しがつて、くれたんだな)

それが何よりも嬉しかつた。
この上ないほど胸打たれた。

そこには確かに価値はないかもしない。

だが、誰も幸せにできない価値に………一体、どんな意味があるのだろう？

その価値という物自体に、今。全く価値を見いだせなくなつた。そしてそれが嫌ではない。

この手を振り払う事を強いる“価値”なんていらない。そんなものを見重視する理由はどこにもない。

無価値も何もない。私には関係ない。

そうでいいのだと。それを今、彼女に教わった。

既成概念が崩れ、改めてどうしたいのかだけを考える。そしてそれは瞬時に終わつた。そんなもの、考えるまでもなかつた。

あの時からずつと、彼女にそう言つてもらいたかつたんだと。目を逸らしていただけだ。愛も価値もなくとも共にいたいのだと、ずつとずつと願つていた。

息を吐き、気持ちを整える。

かつても少し前も告げられなかつた本当の気持ちを、今、やつと口にする。

「ああ……いいよ。その求婚、喜んで受けよう。
それほど追い求めた愛より、
愛の証明足りうる宝物より、
君を愛せもしない私の方がいいというのなら」

椅子から立ち上がり、彼女の手を取る。

抱いた気持ちを違えないよう言葉カタチにして、誓う。

共に行こう。

共にいよう。

永遠に、私は君の隣に在ろう。

想いを表すように強く強く、彼女の手を握り締める。

それにふんわりと微笑む彼女。もう、それだけで良かつた。

笑みを返し、手を握ったまま、一度だけ振り返る。
いつかまで誰もいなかつた、

そしてこれからも誰もいなくなる、故郷の城を。

一瞬目を強く瞑る。そして前を向いた。思うところがない訳がない。

それでも、もう用はない。十分に十二分に、役割は果たしてくれた。
雛鳥が飛び去るのも尻込みするくらいに頑丈すぎる巣だったが、それでも巣立ちの時はやつてきた。

私は幸せの青い鳥ではなかつたが、

私がいてくれるだけで嬉しいと言つてくれる人がいた。

それだけで、巣を後にするには十分だつた。

歩き出す。

止まつていた時計を壊して。

凍り付いていた時間を溶かして。

縛り付けていた鎖を打ち碎いて。

身を委ね、縋つていたものを緩やかに、悉く過去にしていく。

この答えを得るまでに、随分と遠回りした気がする。
それでも、望んだゴールにはたどり着けたのだから——それで
良しとしておこう。

歩みを進める。

ここにはないと思っていた未来が、私達を待っていた。

後書き

主人公は、型月をはじめとして、童謡や神話などの多数のエッセンスを用いています。

ところどころの文言や人間関係具合には思い当たるところも多いかと思います。時にはかなり捻つて二転三転してもいますが。

原作の「彼」と違う姿勢で、けれど同じ行動や結論を導き出した魔術師の生き様、そして真逆の結末に至った物語を堪能して頂けたなら幸いです。

作中で語ったように、経験とは過去に刻まれた傷の別名ですが、それを悔やむだけではなく教訓にできるのも、変化を宿命づけられた人の本質でしょう。

前回を踏まえて、過ちを繰り返さない為に『どうするか』。

始まりが報われなかつた過去を持つ一人ですが、始点は同じでも「繰り返さないよう手を引くか」それとも「望む結果になるまで努力するか」と、スタンスにおいても色々な意味で対極でした。

そんな二人の馴れ初めは、主人公はプロトセイバーに押せ押せなあの愛歌の反転なので、一筋縄ではいかない身持ちの堅さに。

それに対する姫ですが、私の脳内では『恋する乙女は無敵の存在』という謎の認識があるので、アプローチそのものは彼女の方からになっています。

◆
最終話をご覧になつた方ならお判りでしょうが、つまりは、本作の攻略対象^{ヒロイック}は実は主人公の方だつたのでした。

今作のテーマは『表裏・反転・収束』、
裏テーマは『誰かの願いの叶え方』でした。

誰かの願いそのものだつたから、自分の願いを持ち合わせていない二人。

どうの昔に、叶つてしまつた願いだから。それが何よりも尊かつたから。

愛の存在そのものが解らなかつた姫と、
愛される理由を無価値にしてしまう彼。

そんな二人が結ばれた経緯は、大事な何かを引き換えにしたのではなく。

つまらない何かに執着していた、そんな自分に見切りをつけただけ。

作中で『人は期待を裏切る事しかできない』と述べましたが。

その裏切りが悪い方向ばかりである必要はない筈です。

相手の望み通りのものを用意するのではなく。

「愛を必要としていない」「価値を必要としていない」と、期待を超えたものを示すのは裏切りではあつても、決して悪いものではないと。

そんな思いの結果が、欲した愛を放棄しても手を伸ばした少女と、

欲した相手が無価値になる事を飲み込んででも手をとつた青年でした。



『愛とはいひものである』――……というのは、多くの哲学者、倫理学者で一致しています。文学作品でも、それ以外のスタンスを取つてゐる作品は稀かと思います。

愛の為なら、自分を他人を世界を時代を運命を犠牲にできる。

どんなものでも引き換えにしてしまえる。

そんな他の何もかもを省みない、いつそ暴力的なものが愛で。

どれだけ他のものを切り捨てられるかが、その愛の強さの証明になる。

昨今にはそんな風潮があるよう見受けられたので、今回はそれに一石を投じてみました。

述べておきます。結ばれた二人の間に、愛はありません。恋し合つても、想い合うものがあつたとしても、決して愛ではない。

でも、それはいけない事でしょうか。

愛は、いかなる時も問答無用でよいものなのでしょうか。

愛がなければ愛でなければ、それ以外のどんな繋がりも取るに足りないのでしょうか。

私は、そうは思いません。

言葉の意味は一つではない。

何がどんな因果に繋がつてゐるかなんて判然としない。

想い合つていても一緒にいることを選ばなかつた、月の裏側の物語のふたり

のように。

だからこそ、その離別あつてこそ。

『愛し合わずとも愛を引き換えにしてでも、共にある二人』の物語も、あつてもいいと思うのです。

それをハッピーエンドと呼ぶかバッドエンドと呼ぶのかは、皆さんのご自由に。

でももしハッピーエンドと思ってもらえたのなら、こんなに嬉しいことはありません。

それではこのあたりで筆を置かせて頂きます。
重ねてご愛読、本当にありがとうございました！